

築館町文化財調査報告書第4集

伊治城跡

平成3年3月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第4集

伊治城跡

平成3年3月

築館町教育委員会

はじめに

伊治城は古代律令国家が陸奥国経営のために、神護景雲元年に設置した城柵であります。経営とはいえ、実は北進政策の一大拠点であり、土着民から見れば好ましからざる存在であったことも否めない事実であります。これが、当郡の大領外従五位下伊治公皆麻呂の反乱となって表面化しました。

皆麻呂は宝亀11年伊治城において、政府の高官である参議兼按察使紀広純と蝦夷出身で律令政府に大きな貢献をした道嶋一族で牡鹿郡の郡長である道嶋大権を殺し、東征の本拠地である国府と鎮守府を兼ねた多賀城を攻略、炎上させたのであります。この乱は律令政府にとって、歴史始まって以来の危機であり大事件であった訳で、以来30年余に亘る政府と反乱軍の戦いの発端となった城であります。この乱はいろいろの歴史上の疑問をはらんでおり、今後の研究にまつものが沢山あります。

当教育委員会は昭和62年度から第2次発掘調査を進めてまいりましたが、本年度は特に県文化財保護課ならびに多賀城跡調査研究所の全面的な協力を得て、調査を進めました。昨年度の調査において一部掘立柱建物跡が発見されましたが、今年はその延長拡大調査の結果、建物跡3棟また円面窯等が発掘され、政庁跡の解明に向けて大きな期待を抱ける状況になりましたことは、まことに喜ばしい事であります。

調査並びに指導助言をいただきました方々に、心からお礼を申し上げて挨拶といたします。

平成3年3月

築館町教育委員会

教育長 千葉與一郎

例　　言

1. 本書は、栗原郡築館町城生野に所在する伊治城の平成2年度発掘調査の報告書である。
2. 本書には、国庫補助事業計画にもとづく第15次調査と、農道整備事業に伴う第16次調査の結果を収録した。
3. 本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の検討を経て菊地逸夫がおこなった。
4. 本書における土色についての記述には「新版標準土色帖」(1973)を利用した。
5. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
6. 調査における、地区割（グリッド）は、城生野公民館前の任意の点を発掘基準点として定め、この点を原点とする直角座標を組んで割り出しており、基準線の南北軸はN-2°—Wである。なお、図中のW-10、S-180などの表記は原点（伊治1）から西に10m、南に180mであることを表す。
7. 図中にある方位は、座標北を表している。
8. 遺構略号は次のとおりで、通し番号で各遺構に付した。

S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 穫穴住居跡 S K : 土壙跡
S X : その他の遺構
9. 調査成果の一部は、すでに現地説明会・第4回宮城県遺跡調査成果発表会・第17回古代城柵官衙遺跡検討会で公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
10. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が一括して保管している。
11. なお、発掘調査や、資料の整理に際し、次の方々から多大の御指導、御助言をいただいた。
記して、感謝申し上げたい。（敬称略）

増淵　　徹（文化庁文化財保護部記念物課）　金野　　正（元築館女子高校教諭）
佐々木和博（仙台市博物館）　　　　　　　山中　　章（向日市埋蔵文化財センター）
小川　淳一（仙台市教育委員会）　　　　　笠原　信男（築館女子高校）
佐藤　信行（日本考古学协会会员）

調査要項

1. 遺跡名 伊治城跡（宮城県遺跡登載番号：41007）
2. 所在地 宮城県栗原郡築館町城生野
3. 調査主体 築館町教育委員会（教育長 千葉與一郎）
4. 調査期間 第15次調査 900m² 第16次調査 1320m²
5. 調査面積 第15次調査 1990年9月3日～29日
第16次調査 1990年9月27日～10月5日
6. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課・宮城県多賀城跡調査研究所
7. 調査員 宮城県教育庁文化財保護課
白鳥良一、佐藤則之、菊地逸夫、近藤和夫、吾妻俊典
宮城県多賀城跡調査研究所
佐々木茂楨、進藤秋輝、古川雅清、丹羽茂、後藤秀一、柳沢和明、村田晃一
8. 調査協力 加藤利彦、佐藤繁一
白鳥測量設計事務所、築館町農地整備課
9. 調査参加者 高橋佐一、千葉寿見、菅原光男、菅原永松、桑嶋雪男、辻市英男、大場倉由、
佐藤直一、菅原一義、佐藤ふみ子、伊東けい子、高橋ふみ子、千葉千江子、
遠藤義勝、早川浩義（築館町教育委員会）

目次

はじめに	IV 考察
例言	①遺物について
調査要項	○出土土器の特徴と分類.....35
I 遺跡の概要とこれまでの調査成果.....1	○出土土器の年代と問題点.....38
II 遺跡の位置と周辺の遺跡.....2	②遺構について
III 発見された遺構と遺物	○掘立柱建物跡の配置と性格.....39
①掘立柱建物跡.....8	○竪穴住居跡の性格.....41
②竪穴住居跡と出土遺物.....11	V まとめ.....43
③円形周溝墓.....29	伊治城および栗原郡に関する古代史年表
④井戸跡と出土遺物.....31	写真図版.....47
⑤第16次調査の概要と出土遺物.....31	

I 遺跡の概要とこれまでの調査成果

8世紀中葉から後半にかけての宮城県北部は、古代律令政府が積極的に進めていた征蝦夷政策に対し、蝦夷の抵抗が高まり非常に不安定な地域であった。伊治城は、律令政府がこのような情勢の中で、桃生城などとともに陸奥国経営、とりわけ栗原郡を中心とした宮城県北部の拠点にするため、神護景雲元年（767）に設置したものである。続日本記や日本後記には、延暦15年（796）までのこの城にかかる記事があり、それにより当時の具体的な状況を知ることができる。なかでも、この地域=上治郡の長官であった伊治公皆麻呂が宝亀11年（780）に按察使紀広純と牡鹿郡の道嶋大楯を伊治城で殺害し、さらに多賀城を攻撃し放火するという事件「伊治公皆麻呂の乱」は、当時の政府に大きな衝撃を与え、それ以後の政府と蝦夷の対立を深める要因となった。このような状況下で、政府は延暦20年（801）までに4度にわたる軍事遠征を展開した。また、武力行使と並行して他国からの移住策も打ち出し、「延暦15年（796）には「相模・武藏・常陸など8国の民9000人を伊治城に遷し置く」などの記録も見られる。

伊治城は宮城県内における城柵の中で、創建年代が文献に残されている唯一のものとして知られており、その所在地については、これまで多くの検討がなされいくつかの候補があげられている。

所在についての研究は江戸時代の末から行われており、弘化4年（1847）に岩崎綱雄は栗原郡築館町城生野地区を踏査し地形観察を行い、唐崎地区において古瓦を採集し、この地が伊治城跡であるとした。以後、大槻文彦、小泉安次郎、吉田東伍、松森明心、伊東信雄、高橋富雄、金野正、佐藤信行らによって諸説がとなえられている。

なお、伊治城跡に関する詳しい研究史については「伊治城跡I」（多賀城跡調査研究所：1978）を参照されたい。

このように伊治城跡の有力な擬定地である城生野地区の発掘調査は多賀城跡調査研究所により昭和52年度から3年間行われ、城生野字大堀の台地北端で検出された大溝と土壙は外郭北辺の区画施設であることや、竪穴住居跡から出土した墨書き土器や鉄器の性格から報告書では「本遺跡が伊治城である可能性は高い」との見解が示されている。しかし、この3年間の調査では伊治城の政庁や官衙ブロックなどは発見されず、岡田茂弘氏は「このように伊治城と呼ばれてきた遺跡は、伊治城に係わりのある遺跡と推定することはできても伊治城自体とは認め難い。」との異論を発表した。（岡田：1985）

昭和61年度からは築館町教育委員会が主体となり調査を再開し、昭和62年には遺跡中央南よりの唐崎地区で内部を区画するとみられる二重の溝が、翌63年には区画溝の内側から計画的に配置された5棟の掘立柱建物跡がはじめて検出された。これらは官衙ブロックを構成する施設

であるものの、調査区の問題で全体的規模や構成、性格などは明確にできなかった。

本年の調査は昨年の成果を受けその東隣を対象としたもので、これまで検出された区画溝内の建物群の配置やその性格を解明することを主眼とした。調査の結果、新たに掘立柱建物跡2棟と竪穴住居跡8軒が検出され、さらに多数の遺物が出土した。昨年の成果と合わせると掘立柱建物跡は規則正しく配置されており、一つの官衙ブロックを構成することは間違いないことが判明した。年代も伊治城存続年代と一致する。このことから城生野地区は古く岩崎綱雄以来言われた通り、「伊治城跡」であることが、今回の調査で考古学的に証明されたものといえる。

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

のことについては「伊治城跡I」（前出）に詳しい。以下はそれを引用し、若干の加筆をしたものである。

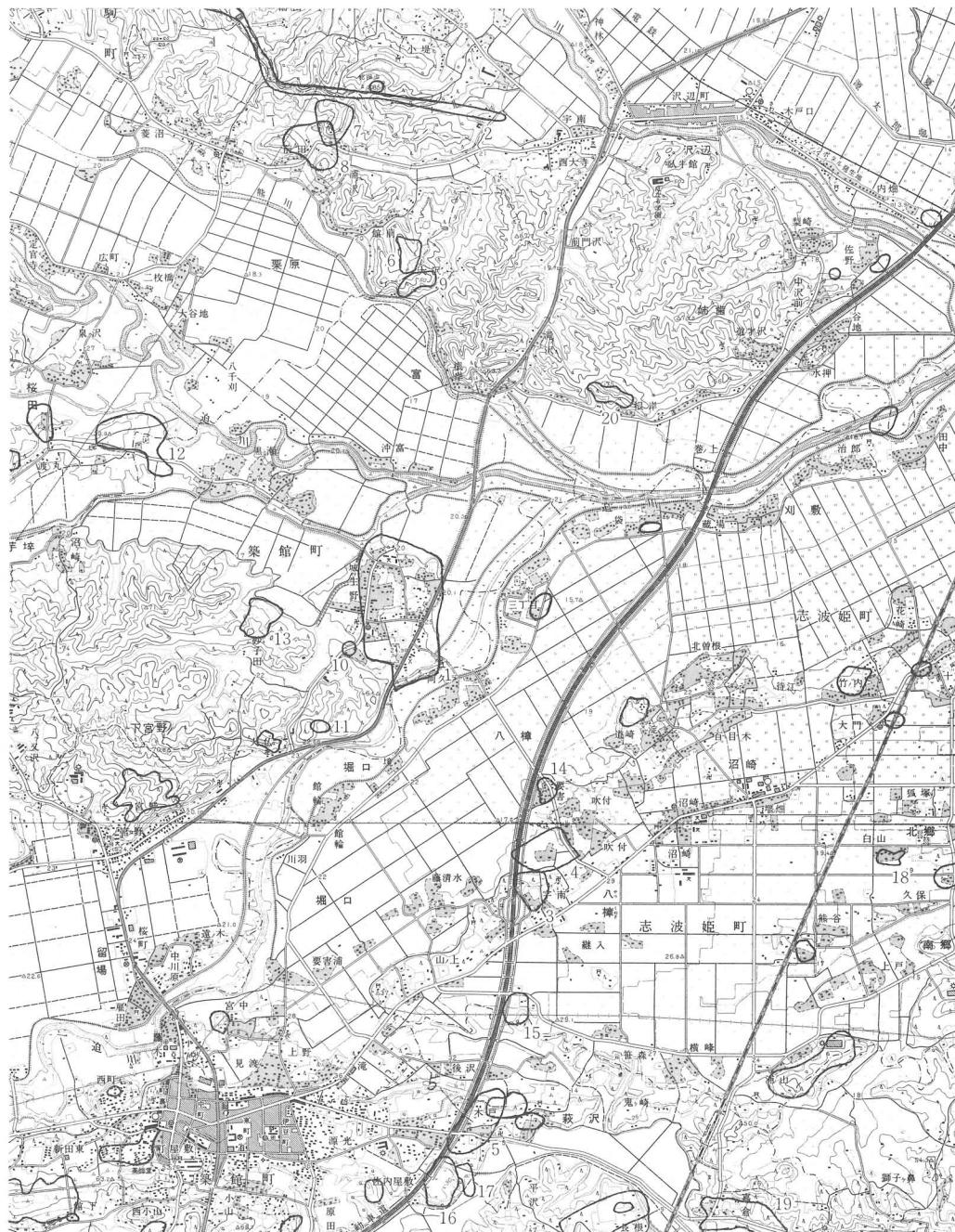
本遺跡は宮城県栗原郡築館町城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52kmに位置し、多賀城と胆沢城をむすぶほぼ中間点にあたる。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分れている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵と接する河岸段丘上に立地している。

この段丘は東を一迫川、北を二迫川、西と南は小さな谷によって画され、南東部で背後の丘陵に接しており、北に張り出したほぼ方形の独立した台地状の地形をなしている。段丘面の標高は約22～24mで、その広さは東西約800m、南北約900mほどである。遺跡の範囲はこの丘陵全域と推定され、その規模は東西約700m、南北は南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあたりと考えれば、約900mとなる。段丘の東、北、西には比高約6mの段丘崖がみられ、その前面には広い沖積地が続いている。

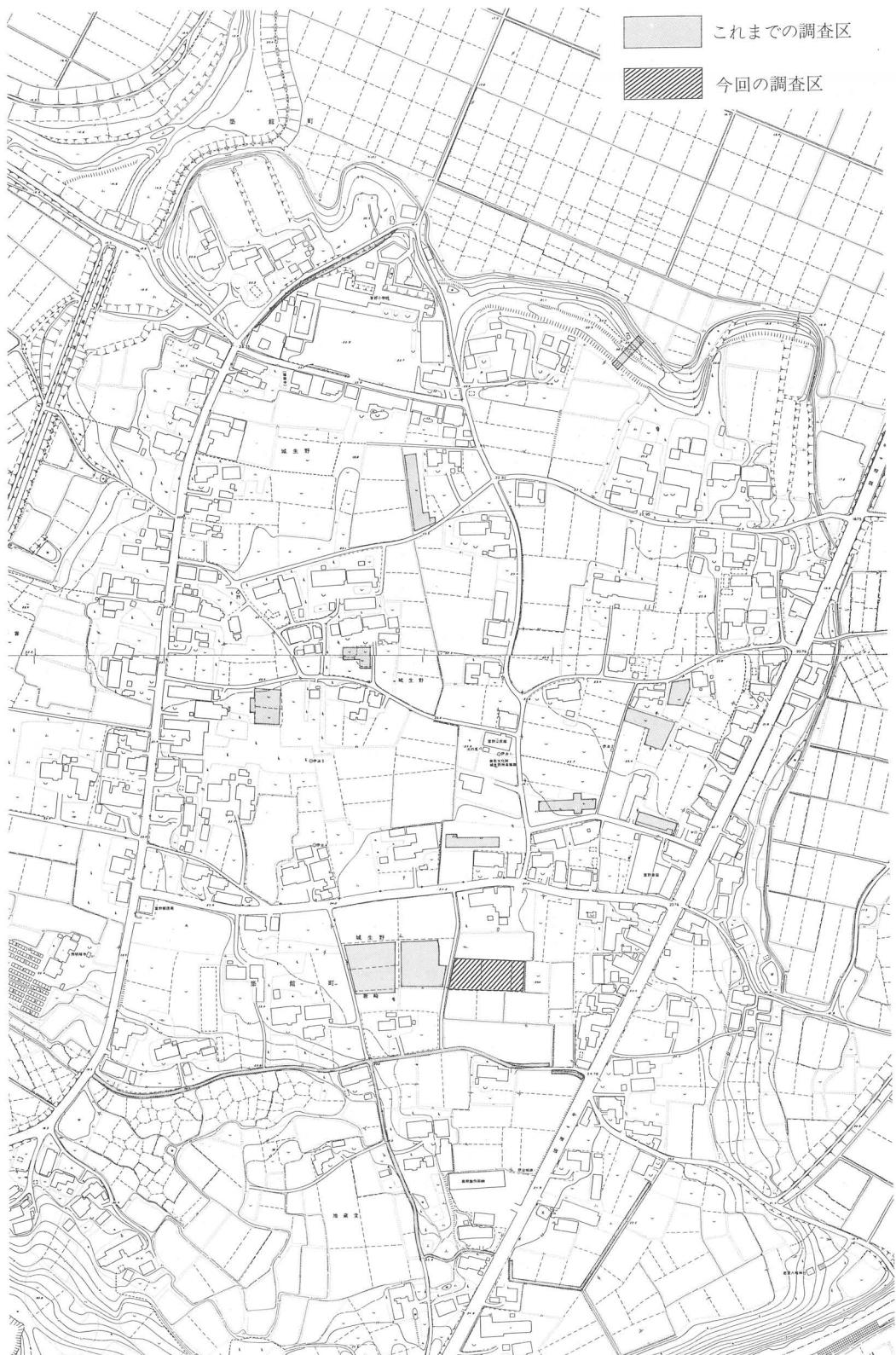
台地上は現在、城生野地区の集落があり、大堀、唐崎、要害、地蔵堂などの小字名が見られ、100戸を超える住宅が立ち並んでいる。宅地を除く平坦部分はおもに水田および畠地として利用され、段丘崖などの斜面部分は杉林や荒地として原地形が残されている。

表面から観察される遺構としては、台地北端部に東西にのびる長さ150mほどの空堀状の大溝と、その北に接して走る土壙状のわずかな高まりがある。かつて松森明心氏が作成した略図によると、この大溝はさらに西の富野小学校の西側付近まで延びていたことが知られる。遺物については、台地のほぼ全面にわたって土師器や須恵器の散布が見られ、中でも中央部から南半分にあたる唐崎や要害地区に多く分布する。この地区ではこれまでの開田工事の際にも多量



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	伊治城跡	台地	城・柵跡	奈良、平安	11	大仏古墳群	丘陵面	円墳	奈良、平安
2	八幡土塁跡	丘斜面	土塁	土塁	12	長者原遺跡	丘陵	集落跡	繩文(中)、奈良、平安
3	御駒堂遺跡	台地	包含地	古墳、奈良、平安、近世	13	堀切長根遺跡	丘斜面	包含地	奈良
4	宇南遺跡	台地	集落跡	繩文(前)、奈良、平安	14	鶴ノ丸遺跡	台地	城館	繩文(晚)～近世
5	佐内屋敷遺跡	台地	集落跡	繩文(中)、奈良、平安	15	山ノ上遺跡	台地	包含地	奈良
6	新山神社跡	丘陵	包含地	繩文	16	横須賀貝塚	丘陵地	貝塚	繩文(晚)、弥生(中・後)
7	栗原寺跡	丘斜面	包含地	奈良、平安	17	木戸平沢遺跡	台地	包含地	繩文
8	尾松遺跡	丘斜面	包含地	奈良、平安	18	狐塚遺跡	台地	包含地	奈良、平安
9	大沢横穴古墳群	丘斜面	横穴古墳	古墳(後)、奈良、平安	19	嘉倉貝塚	台地	貝塚	繩文(早・前)、弥生(中・後)
10	甚内屋敷遺跡	丘陵端	包含地	奈良	20	姉歯横穴古墳群	丘斜面	横穴古墳	古墳(後)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区と周辺の地形

の遺物が出土しており、とくに唐崎地区からは多賀城政序Ⅱ期の瓦と同一意匠の重圈文軒丸瓦が出土している。

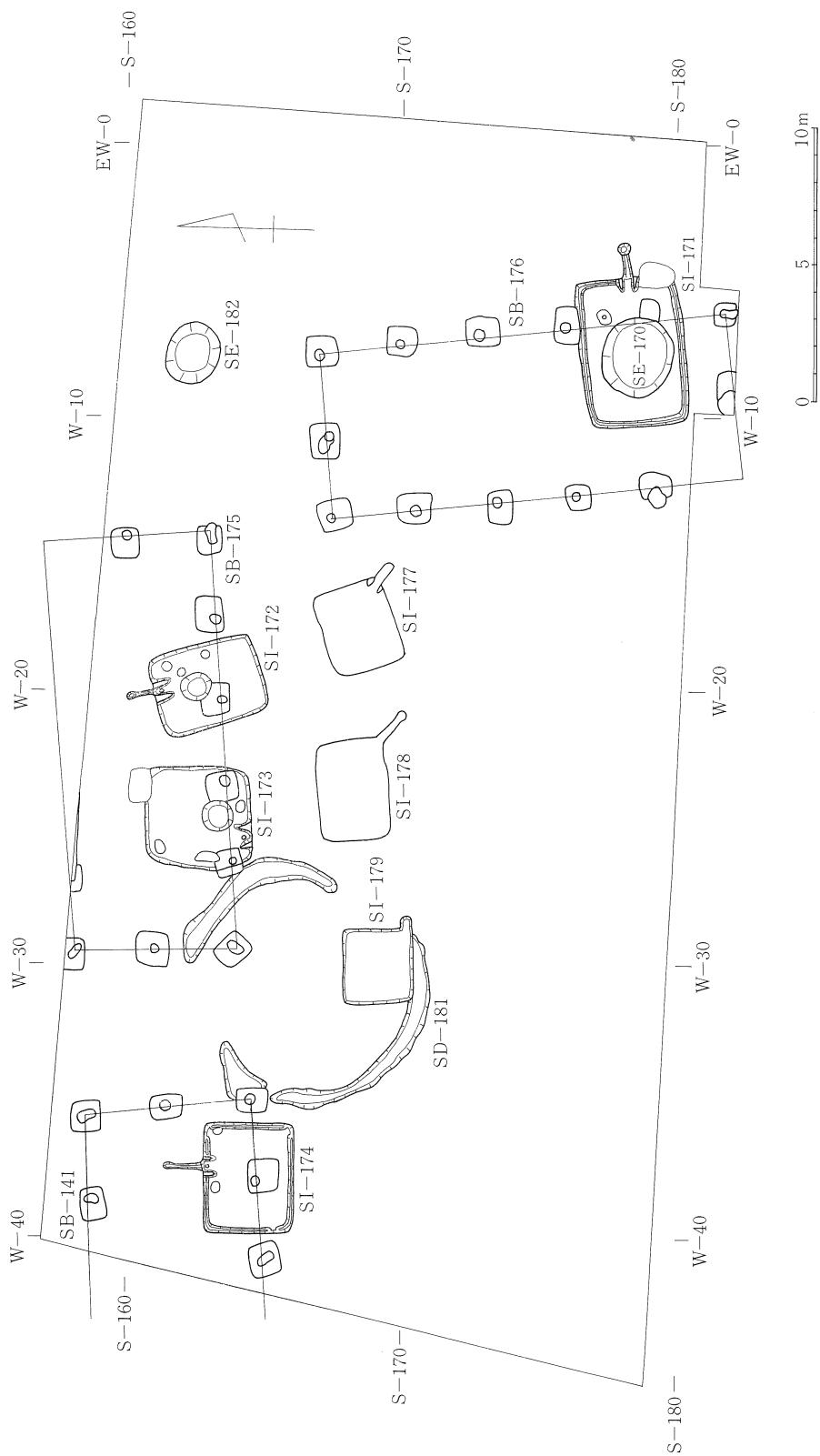
次に本遺跡周辺の古墳時代末期から古代にかけての歴史的環境を概観してみたい。

周辺の遺跡は二迫川流域遺跡群と一迫川流域遺跡群にわけられる。二迫川流域についてみると、北岸の栗駒町鳥矢崎から金成町姉歯にかけての丘陵上には、33基の小円墳からなる鳥矢崎古墳群がある。この古墳群のうち2基が昭和46年に発掘調査され、横穴式石室と組合せ木棺、銅製鎧帶金具一式、蕨手刀などが発見されている。またこの丘陵の南斜面には大沢横穴古墳や姉歯横穴古墳群がある。これは内陸部における横穴の北限線である。集落遺跡としては、この丘陵の東端部に立地する佐野遺跡があり、奈良から平安時代にかけての堅穴住居跡が15軒検出されている。二迫川南岸では本遺跡の他、奈良・平安時代の遺物を散布する長者原遺跡がみられるだけで、古代の遺跡は比較的少ない。一迫川流域では、北岸の丘陵上に御弊森古墳群や小館山横穴古墳群などがみられ、南岸の築館町伊豆野から若柳にのびる低い丘陵や河岸段丘上には鶴ノ丸遺跡、宇南遺跡、御駒堂遺跡、佐内屋敷遺跡、山の上遺跡、糠塚遺跡などの奈良から平安時代にかけての遺跡がある。中でも、御駒堂遺跡では、8世紀初頭に関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や遺構が検出されており（小井川・小川：1982）、神護景雲3年（769）に栗原郡が建郡される以前のこの地域を考えるうえで、きわめて注目される。また、発掘調査によるものではないが、本遺跡の東4kmには、開田工事の際検出された狐塚窯跡がある。ここでは、ヘラ切り無調整の坏を主体に焼成し、製品は本遺跡にも供給されていた可能性がある。（金野・佐藤：1976）

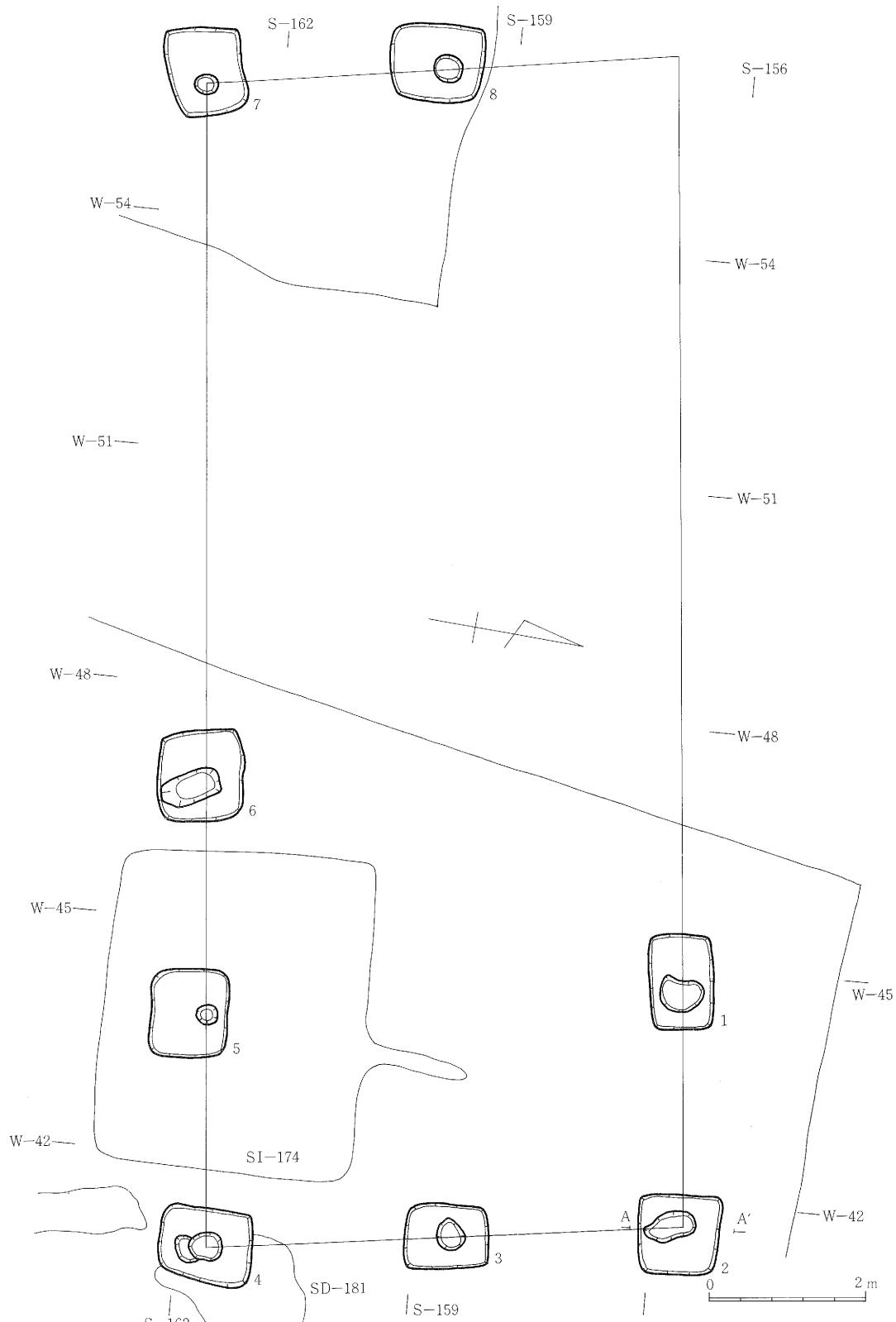
III 発見された遺構と遺物

第15次調査

検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟・堅穴住居跡8軒・円形周溝墓1基・井戸跡2基である。今回は、これらの中で掘立柱建物跡3棟と堅穴住居跡のうち建物跡と重複する6軒、円形周溝墓1基について精査を行ったが、他の遺構については確認のみにとどめた。また、遺物には土師器（坏、甕）・須恵器（坏、高台付坏、双耳坏、蓋、鉢、甕、壺、長頸壺、）・円面硯がある。



第3図 第15次調査区遺構配置図



第4図 SB-141建物跡

① 掘立柱建物跡

SB-141建物跡（第4図）

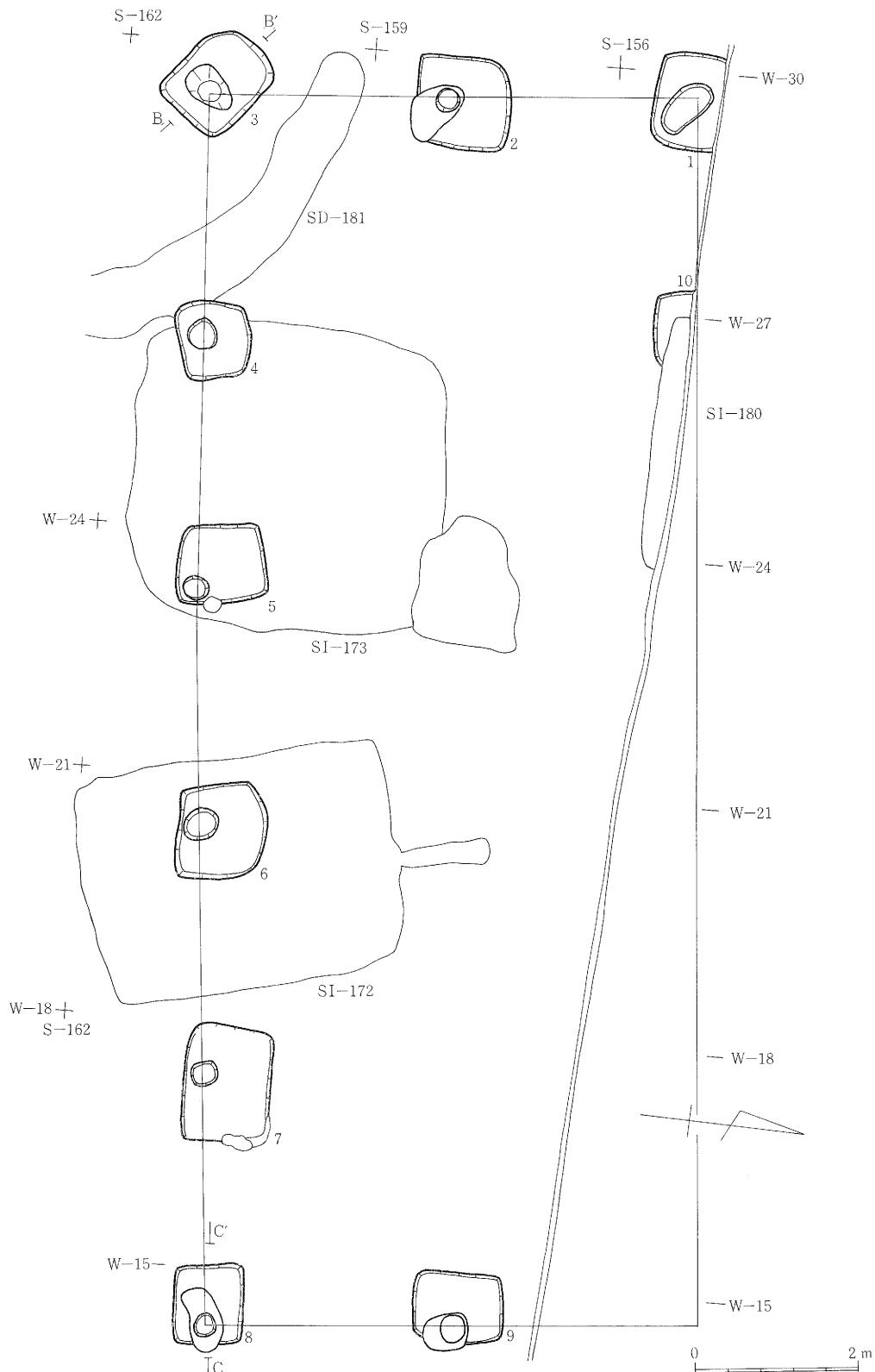
昨年の11次調査で西側部分が検出されていたもので、今回東半分が検出された。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。SI-174住居跡と重複しており、これよりも古い。柱間寸法は桁行が南側柱列で東から2.9m・3.0m・9.1m（3間分）で総長15.0m、梁行が東妻で南から3.1m・3.0mで総長6.1mである。建物の方向はN-9°-Wである。柱穴は一辺が90~120cmの方形で、深さは東妻北東隅のP2で約50cmあり、埋土は黄褐色土と暗褐色土の粗い互層である。東妻中央のP3と南側柱列の東から2番目のP5では柱痕跡が認められ、それによると柱は円形で直径約25cmある。また、それ以外の柱穴からは柱抜き取り痕が認められた。

SB-175建物跡（第5図）

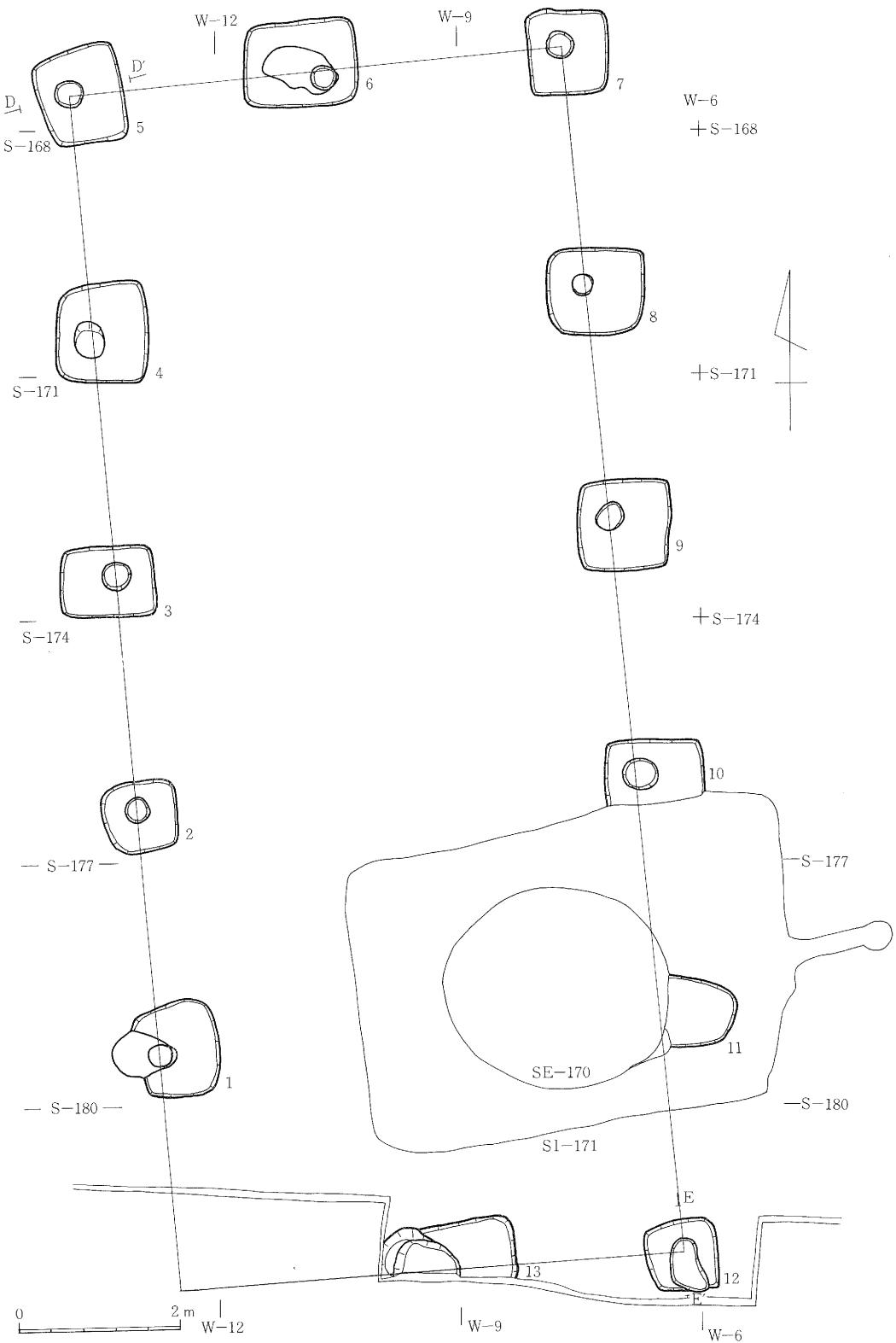
桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、桁行の北側柱列の一部は調査区外へと延びる。SI-172・SI-173・SI-180住居跡と重複しており、これらよりも古い。柱間寸法は桁行が南側柱列で東から3.0m・3.1m・2.9m・3.1m・3.0mで総長15.1m、梁行が東妻で南から3.0m・3.0mで総長6.0mである。建物の方向はN-7°-Wである。柱穴は一辺が90~120cmの方形で、深さは断ち割りを行った西妻南西隅のP3と東妻南東隅のP8で約60cmあり、埋土は黄褐色土と暗褐色土の粗い互層である。南側柱の南西隅のP3から5番目のP7までの5つの柱穴では、柱痕跡が認められ、それによると柱は円形で直径約25cmある。また、それ以外の柱穴からは柱抜き取り痕が認められた。

SB-176建物跡（第6図）

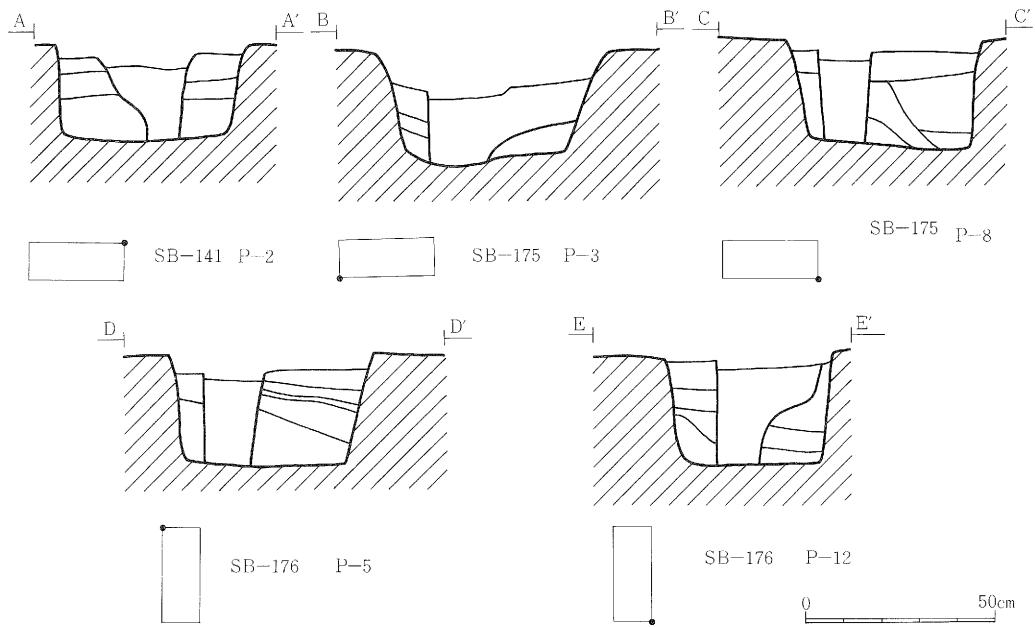
桁行5間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡で、梁行の南西隅柱穴は調査区外に延びる。SI-171住居跡と重複しており、これよりも古い。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から3.0m・2.9m・3.1m・3.0m・2.9mで総長14.9m、梁行が北妻で東から3.0m・3.1mで総長6.1mである。建物の方向はN-7°-Wである。柱穴は一辺が80~120cmの方形で、深さは断ち割りを行った北妻北西隅のP5と南妻南東隅のP12で約60cmあり、埋土は黄褐色土と暗褐色土の粗い互層である。西側柱の南西隅から3番目のP3から北西隅のP5までの4つの柱穴と東側柱の北東隅のP7から北から4番目のP10までの8つの柱穴からは柱痕跡が認められ、それによると柱は円形で直径約25cmある。また、それ以外の柱穴からは柱抜き取り痕が認められた。



第5図 SB-175建物跡



第6図 SB-176建物跡



第7図 掘立柱建物柱穴断面図

② 壇穴住居跡と出土遺物

SI-171号住居跡（第8図）

〔遺構の確認〕 調査区南東寄りで、SB-175建物跡の南東約20m付近に位置し、地山ローム面で確認された。

〔重複〕 住居北壁でSB-176号建物跡の柱穴を切っており、さらに床面下からもこの建物の柱穴が検出されていることから、これよりも新しい。また住居の中央にはSE-170号井戸跡が掘り込まれており、これよりも古い。したがって新旧関係はSB-176建物跡→SI-171住居跡→SE-170井戸跡となる。

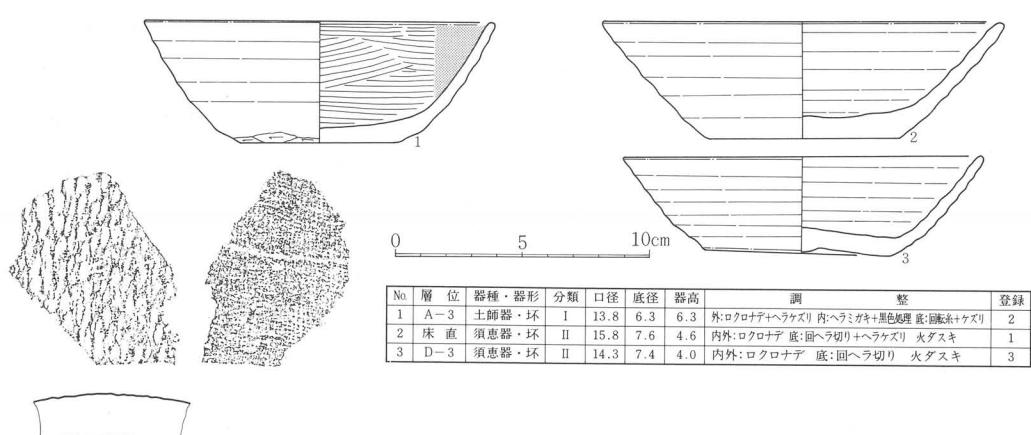
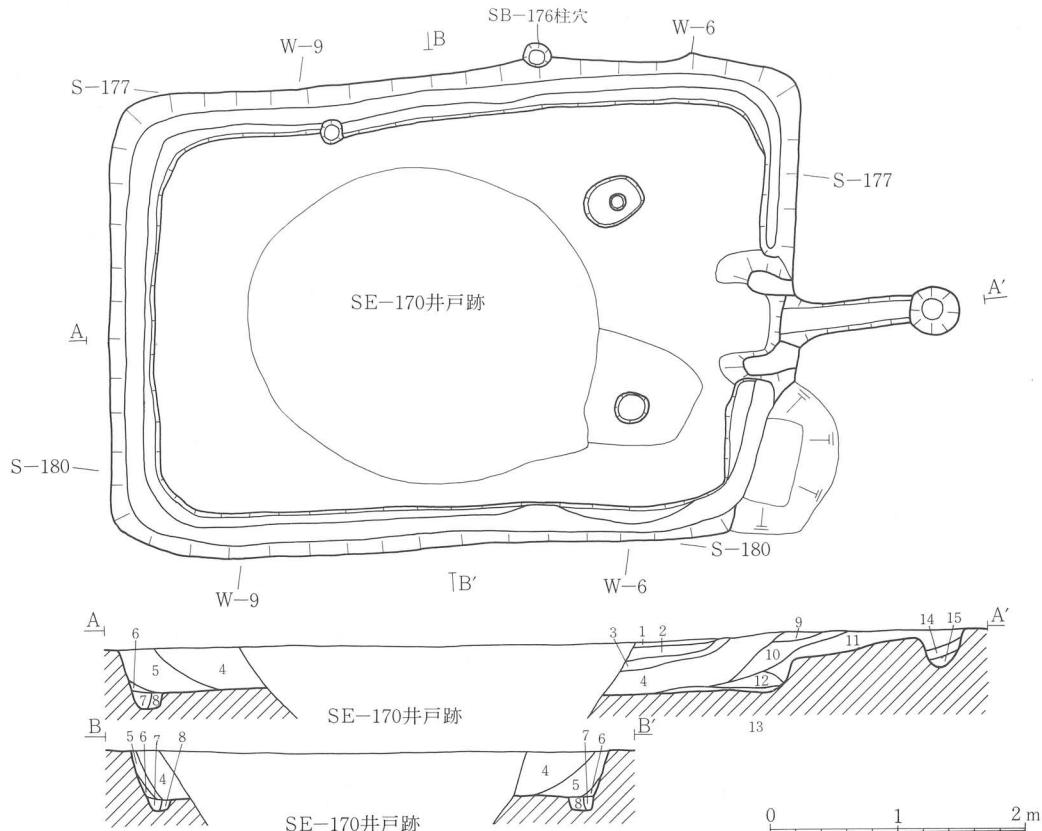
〔平面形・規模〕 住居の平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は、南北約3.7m、東西約5.4mである。

〔堆積土〕 4層に大別される。いずれも自然流入土で、1は黒褐色の軟らかい土で住居中央附近に、2は灰白色火山灰、3は暗褐色のシルトで床面全体に厚く、4は暗褐色のシルトで壁ぎわに堆積している。

〔床面・壁〕 地山を床としている。ほぼ平坦で西から東に向かって緩やかに傾斜している。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。残存状況は良好で、壁高は床面から約40cmある。

〔カマド〕 東壁中央部に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色の粘土を積み上げて構築している。底面はほぼ平坦で25cmほどの段（奥壁）をへて煙道部へと続く。煙道部は長さ約1.0mあり、半地下式であると考えられる。先端部には径40cm、深さ40cmの円形の煙出しピットが取り付き、底面はこれに向かって緩やかに上っていく。

〔柱穴〕 床面から2つの柱穴が検出されている。P1は40×60cmの楕円形で柱痕跡が認められ、



第8図 SI-171住居跡と出土遺物

それによると、柱は円形で直径約15cm ある。P2はSB-176建物跡の柱穴と重複して検出されている。

〔周溝〕 カマドの部分を除く住居全体の壁直下から検出されている。幅30～40cm、深さ約10cmで、断面形はU字形である。また、周溝内の壁際には幅15cm ほどで帯状に褐～暗褐色土が巡っており壁材の痕跡と考えられる。したがって本住居における周溝は暗渠、排水の目的よりも壁材を押さえるために掘られたものと考えられる。

〔出土遺物〕 住居中央がSE-170井戸跡により失われており出土遺物の量は少ない。図示できたものとしては床面及び堆積土から土師器（坏）、須恵器（坏）などがある。

SI-172号住居跡（第9図）

〔遺構の確認〕 調査区北側中央のSB-175建物跡の南側柱列と重複する位置の地山ローム面で確認された。

〔重複〕 床面下からSB-175号建物跡の柱穴が検出されており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 住居の平面形は南北に長い長方形であり、規模は、南北約3.6m、東西約2.6mである。

〔堆積土〕 4層に大別される。いずれも自然流入土で、1は黒褐色の軟らかい土で住居中央上面に、2はにぶい黄褐色のシルトで全体に厚く、3は暗褐色の粘性の強いシルトで住居中央に、4は黒褐色のシルトで壁寄りの部分に堆積している。

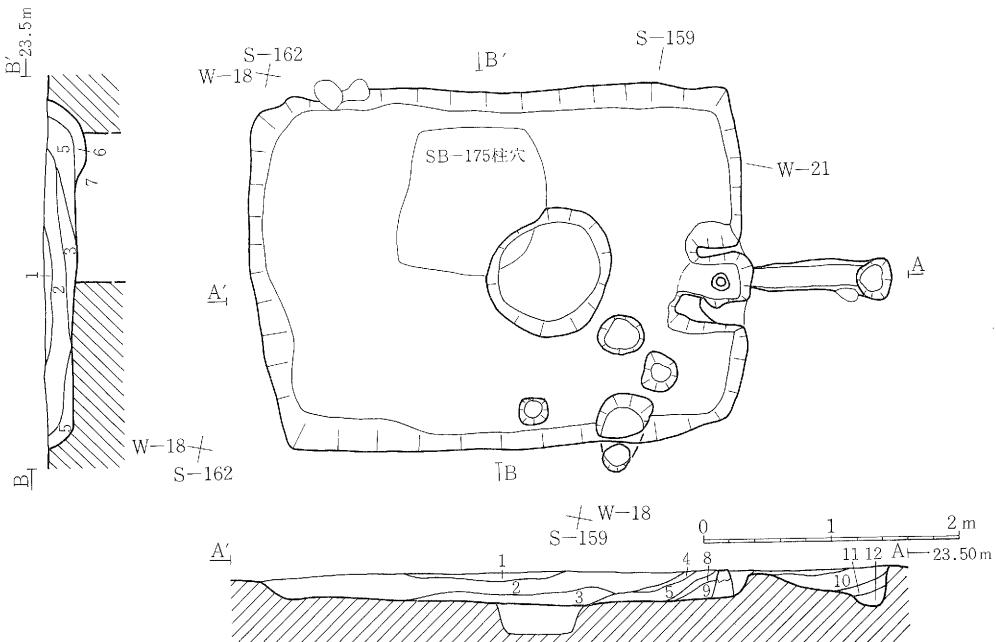
〔床面・壁〕 地山を床面とし、ほぼ平坦である。壁は床面から垂直には立ち上がらず、わずかに外傾する。壁高は15～25cm ある。

〔カマド〕 北壁中央部に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は黄褐色の粘土を積み上げて構築している。底面はほぼ平坦で、25cm ほどの高さの奥壁をへて煙道部へと続く。また底面の中央部には土師器甕を伏せて据え支脚としている。煙道部は長さ約0.8mあり、半地下式であると考えられる。先端部には径30cm、深さ30cm の円形の煙出しピットが取り付き、底面はこれに向かって緩やかに下っていく。また、このカマドとは別に東壁北寄りの部分から、焼土を多く含む径約40cm の円形の窪みとそこから壁を掘り抜いて住居外へと延びるトンネル状の施設が検出されており、古い時期のカマドの可能性がある。

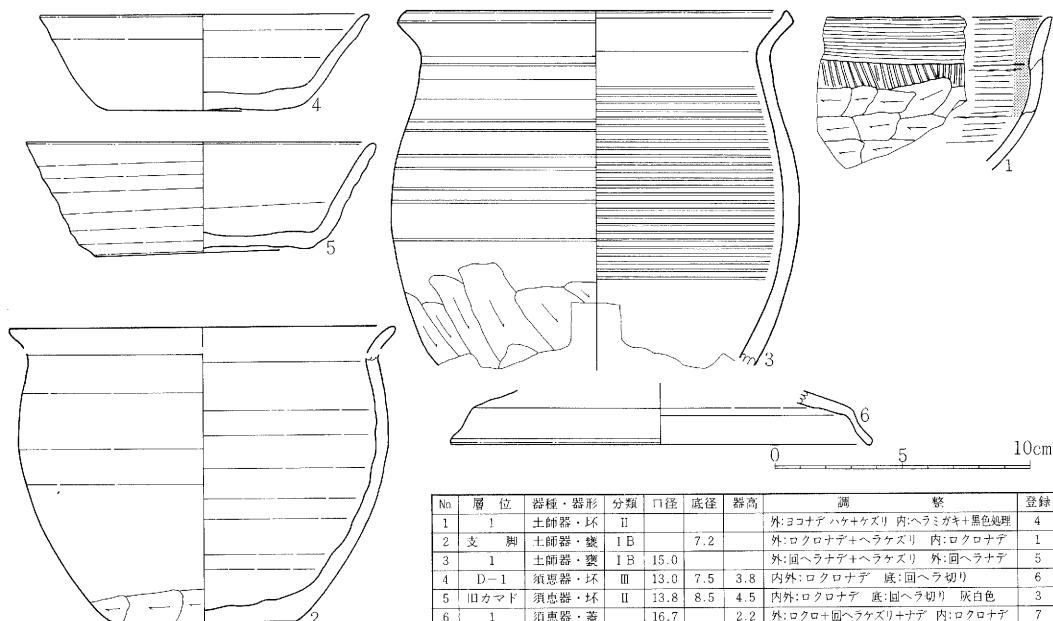
〔柱穴〕 床面からはいくつかのピットが検出されているが、柱穴と断定されるものはない。

〔床面の施設〕 床面中央から径約1.0m、深さ15～20cm の円形の土壙が検出された。焼面などは伴わず、性格は不明である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器（坏・甕）、須恵器（坏・蓋）などが出土している。2はカマドの支脚として使用されていたものである。

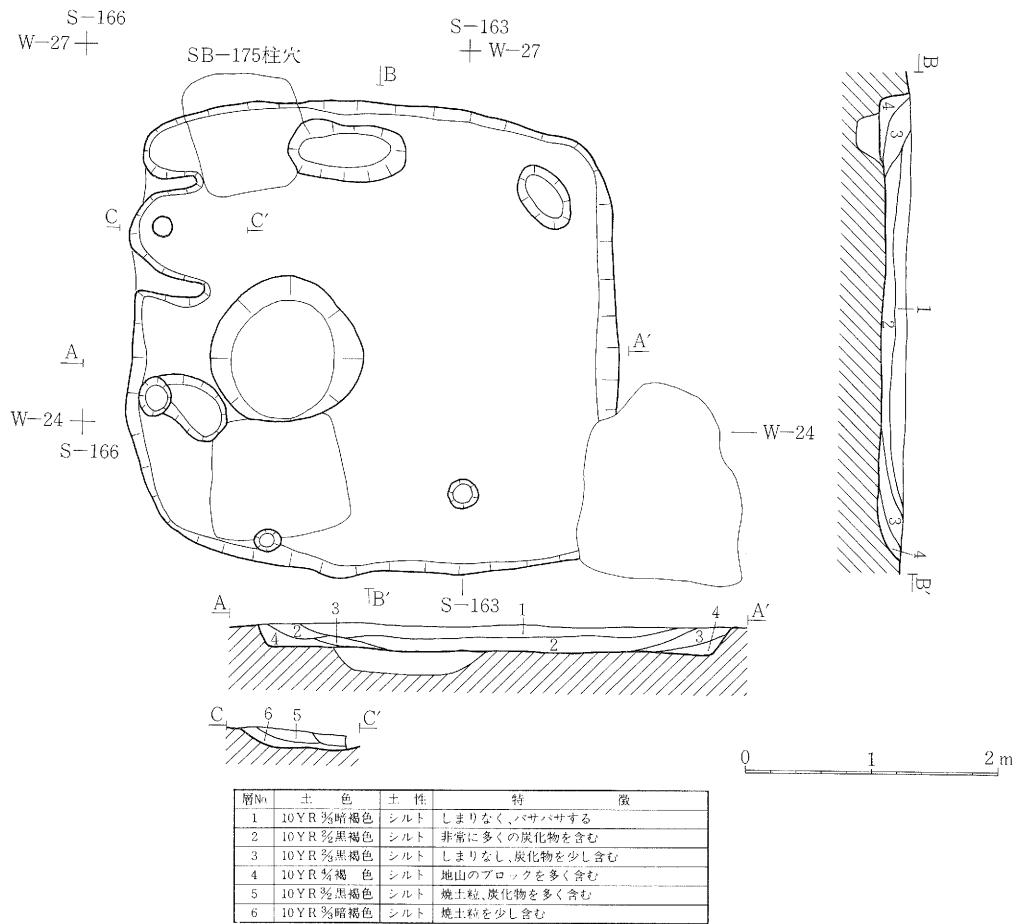


層No	土色	土性	特徴
1	10YR 1/2 黒褐色	シルト	しまりなく、ペサバサしている
2	10YR 1/2 黄褐色	シルト	地山粒を多く、炭化物を少し含む
3	10YR 1/2 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少し含む
4	10YR 1/2 黄褐色	粘土質シルト	
5	10YR 1/2 黒褐色	シルト	地山粒や炭化物を少し含む
6	10YR 1/2 暗褐色	シルト	地山粒を多く含む
7	10YR 1/2 暗褐色	粘土質シルト	SB-176遺物跡柱穴埋土
8	10YR 1/2 暗褐色	シルト	カマド燃焼部堆積土
9	5YR 1/2 赤褐色	シルト	焼土を多く含む カマド燃焼部堆積土
10	10YR 1/2 暗褐色	シルト	炭化物を若干含む カマド煙道部堆積土
11	10YR 1/2 暗褐色	シルト	炭火物を若干含む カマド煙道部堆積土
12	5YR 1/2 黑褐色	粘土質シルト	炭化物を多く含む カマド煙道部堆積土



No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調査	登録
1	!	土師器・环	II				外:ヨコナデ ハケ+ケズリ 内:ヘラ:カキ+黒色処理	4
2	支脚	土師器・縁	1B		7.2		外:ロクロナデ+ハラケズリ 内:ロクロナデ	1
3	1	土師器・甕	1B	15.0			外:ヘラナデ+ヘラケズリ 内:同ヘラナデ	5
4	D-1	須恵器・环	III	13.0	7.5	3.8	内外:ロクロナデ 底:回ヘラ切り	6
5	口カマド	須惠器・甕	II	13.8	8.5	4.5	内外:ロクロナデ 底:回ヘラ切り 灰白色	3
6	1	須恵器・蓋		16.7		2.2	外:ロクロ+回ヘラケズリ+ナデ 内:ロクロナデ	7

第9図 SI-172住居跡と出土遺物



第10図 SI-173住居跡

SI-173号住居跡（第11～17図）

〔遺構の確認〕調査区北側中央のSB-175建物跡の南側柱列と重複する位置にあり、東側に隣接するSI-172住居跡との間隔は約2mである。地山ローム面で確認された。

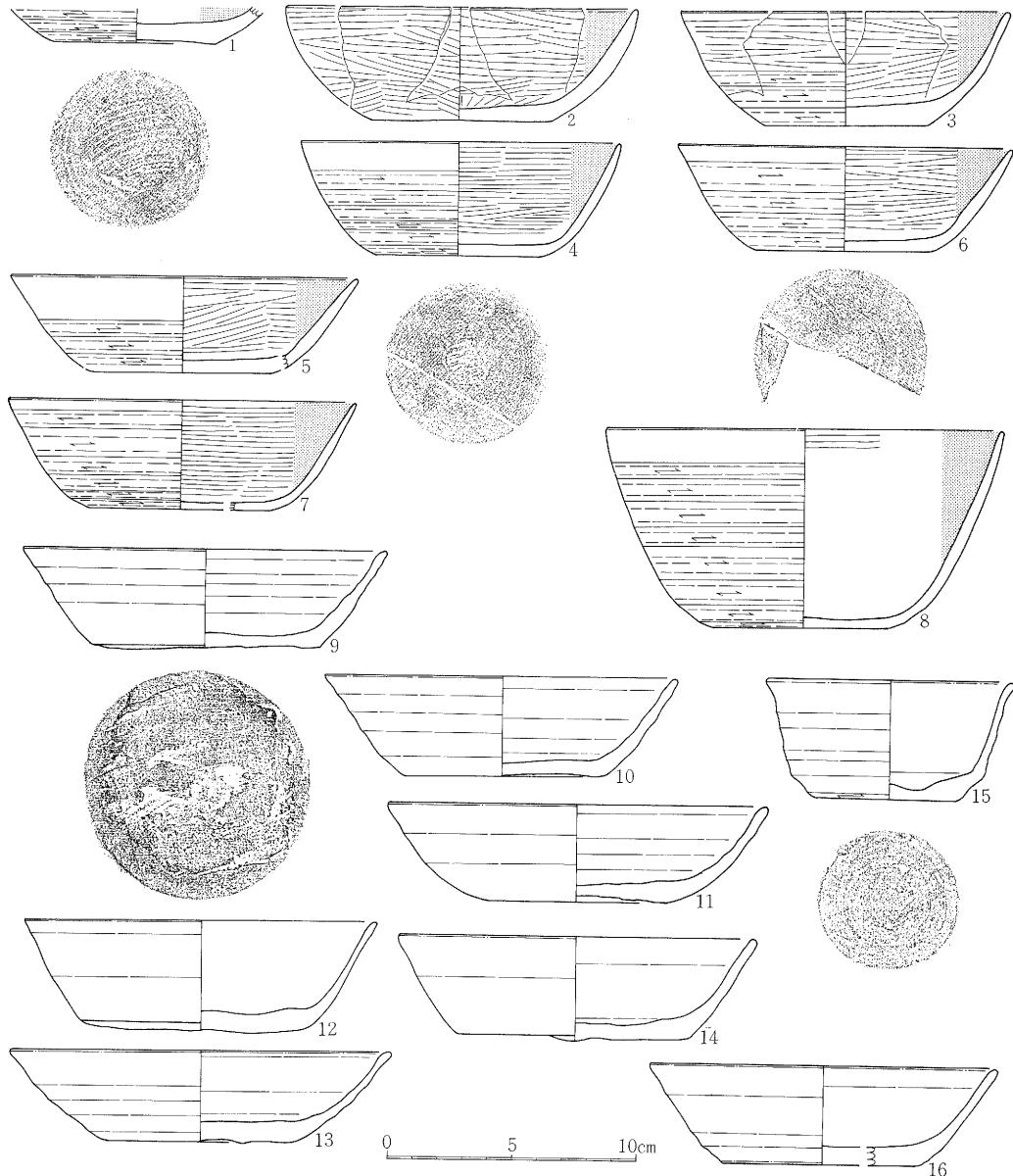
〔重複〕住居西壁でSB-175号建物跡の柱穴を切っており、さらに床面下からもこの建物の柱穴が検出されていることから、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕住居の平面形は隅の丸い正方形で、規模は、一辺約3.7mある。

〔堆積土〕4層に大別され、いずれも自然流入土である。1は黒褐色の軟らかい土で住居中央上面に堆積している。2は非常に多くの木炭を含む黒褐色のシルトで下面には焼土が若干含まれる。中央部で床面を直接覆う部分もあるが、3・4層が壁際を埋めた後に堆積したものである。

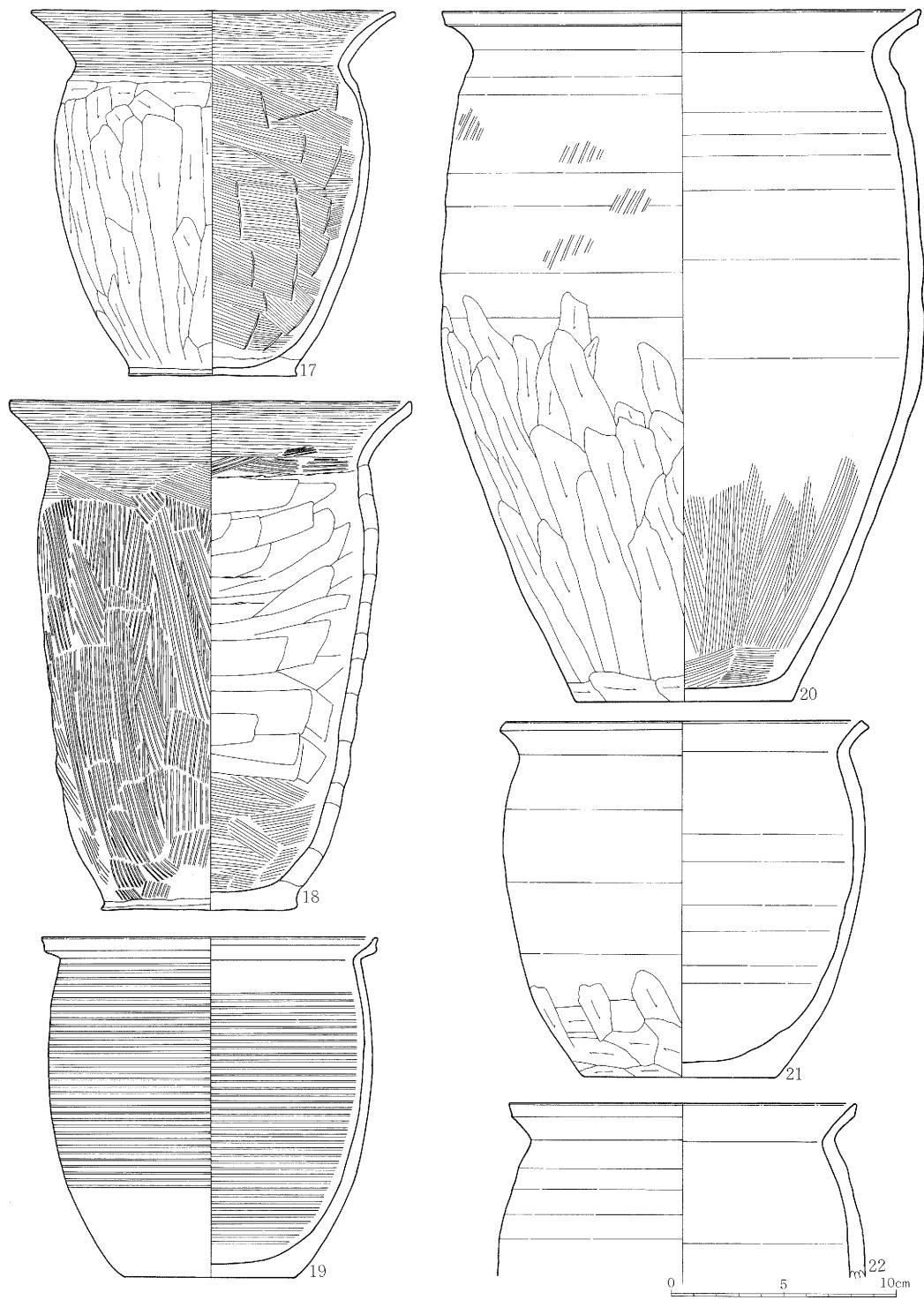
〔床面・壁〕地山面を床面とし、ほぼ平坦である。壁は床面から垂直には立ち上がりず、わずかに外傾する。壁高は10～30cmある。

〔カマド〕南壁西寄りに付設されており、燃焼部のみ検出された。側壁は黄褐色の粘土を積み上げて構築している。底面はほぼ平坦で、中央部には土師器甕を伏せて据え支脚としている。



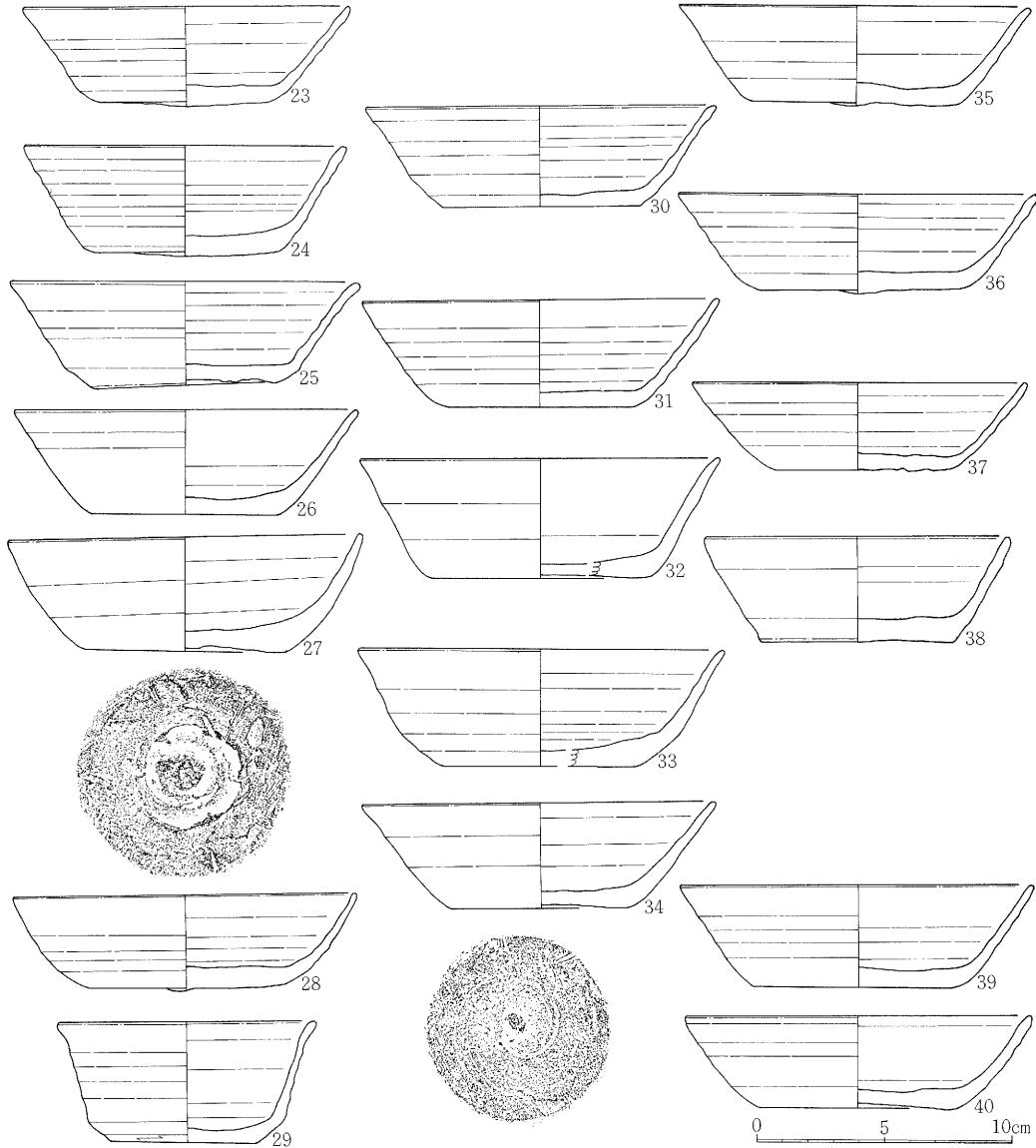
No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調 整	登録
1	床 直	土師器・环	I	6.5			外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色 底:静止系切+回ケズリ	72
2	D-2	土師器・环	II	14.2	7.2	4.6	外:ヘラケズリ+ヘラミガキ 内:ミガキ+黒	73
3	A-2	土師器・环	I	13.2	6.5	4.6	外:ロクロ+回ヘラケズリ+ヘラミガキ 内:ミガキ+黒色処理 底:回ケズリ	70
4	C-2	土師器・环	I	12.9	6.8	4.6	外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色 底:静止系切+回ケズリ	69
5	1	土師器・环	I	14.0	7.2		外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色処理	71
6	D-2	土師器・环	I	13.4	7.0	4.2	外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色処理 底:回ケズリ	68
7	A-2	土師器・环	I	14.0	7.2	4.4	外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色処理 底:回ケズリ	74
8	D-1	土師器・环	I	16.0	7.0	8.0	外:ロクロ+回ヘラケズリ 内:ミガキ+黒色処理 底:回ケズリ	75
9	床	須恵器・环	III	14.7	9.1	4.0	内外:ロクロナデ 底:手ケズリ	17
10	D-2	須恵器・环	II	14.3	7.5	4.1	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り 灰ダスキ	18
11	床	須恵器・环	I	15.3	7.1	4.0	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り 軟質 赤褐色	39
12	P-4	須恵器・环	III	14.2	9.3	4.5	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り 灰白色	19
13	床	須恵器・环	I	15.4	7.7	3.8	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り 軟質	42
14	床 直	須恵器・环	I	14.5	9.4	4.2	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り 灰白色 灰ダスキ	45
15	床 直	須恵器・环	III	10.2	5.7	4.8	内外:ロクロナデ 底:回転ヘラケズリ 灰白色	47
16	床 直	須恵器・环	III	14.0	7.9	4.0	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り+ナデ 灰ダスキ	16

第11図 SI-173住居跡出土遺物(1)



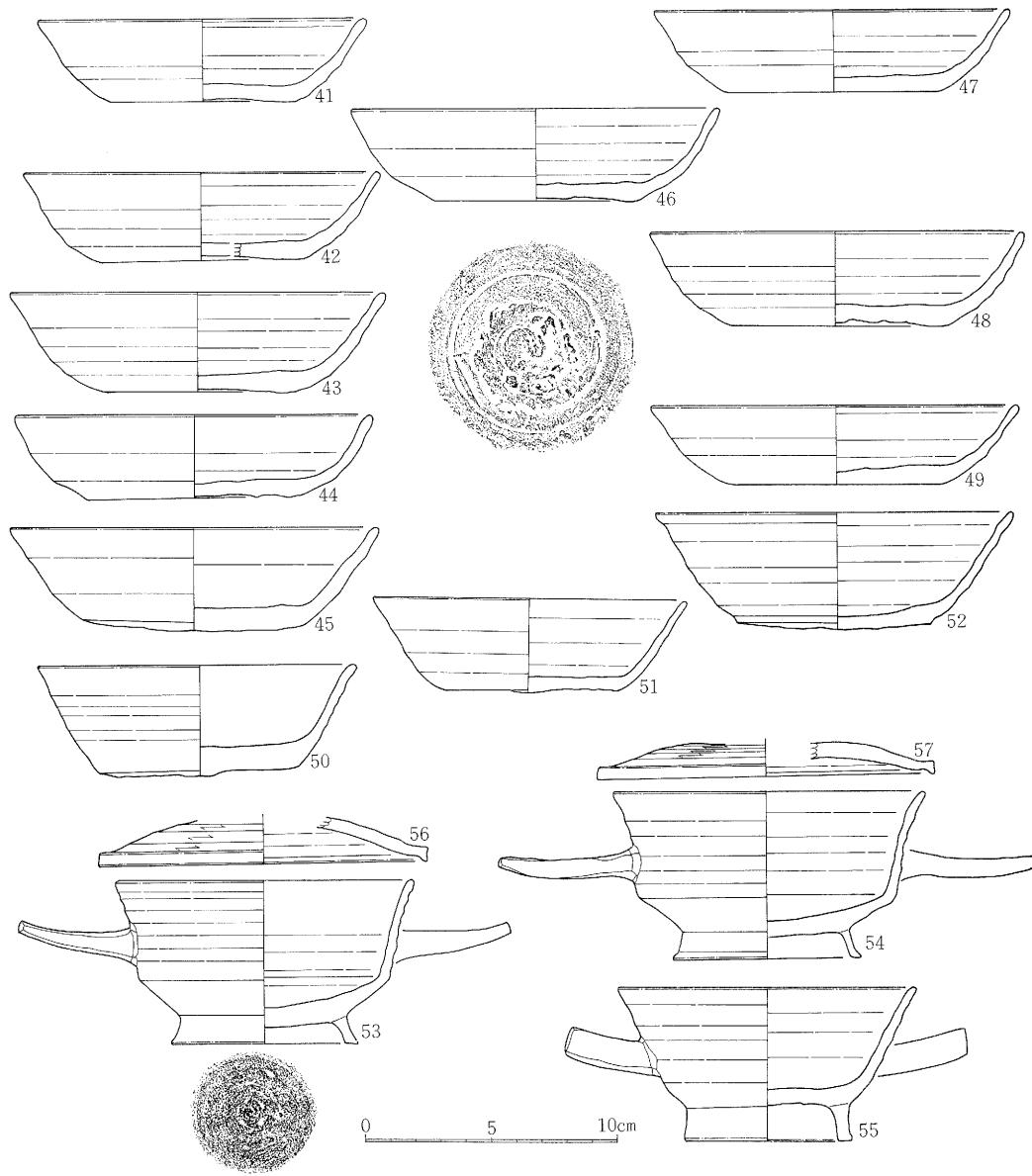
No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調 整	登録
17	2	土師器・甕	II B	16.4	7.5	16.3	外:上ヨコナデ 体ヘラケズリ 内:ヘラナデ	78
18	床	土師器・甕	II A	18.0	8.8	22.8	外:上ヨコナデ 体ハケ 内:上ハケ+ナデ 下ヘラケズリ、ヘラナデ	76
19	床	土師器・甕	I B	15.0	7.5	15.1	内外:同ヘラナデ 底:向転糸切り	77
20	床	土師器・甕	I A	21.4	9.7	31.2	外:タタキ+ロクロ+ヘラケズリ 内:ロクロ+ナデ	81
21	床 直	土師器・甕	I B	16.0	8.5	16.0	外:ロクロ+ヘラケズリ 内:ロクロナデ	79
22	C-2	土師器・甕	I B	15.4			外:ロクロ	67

第12図 SI-173住居跡出土遺物 (2)



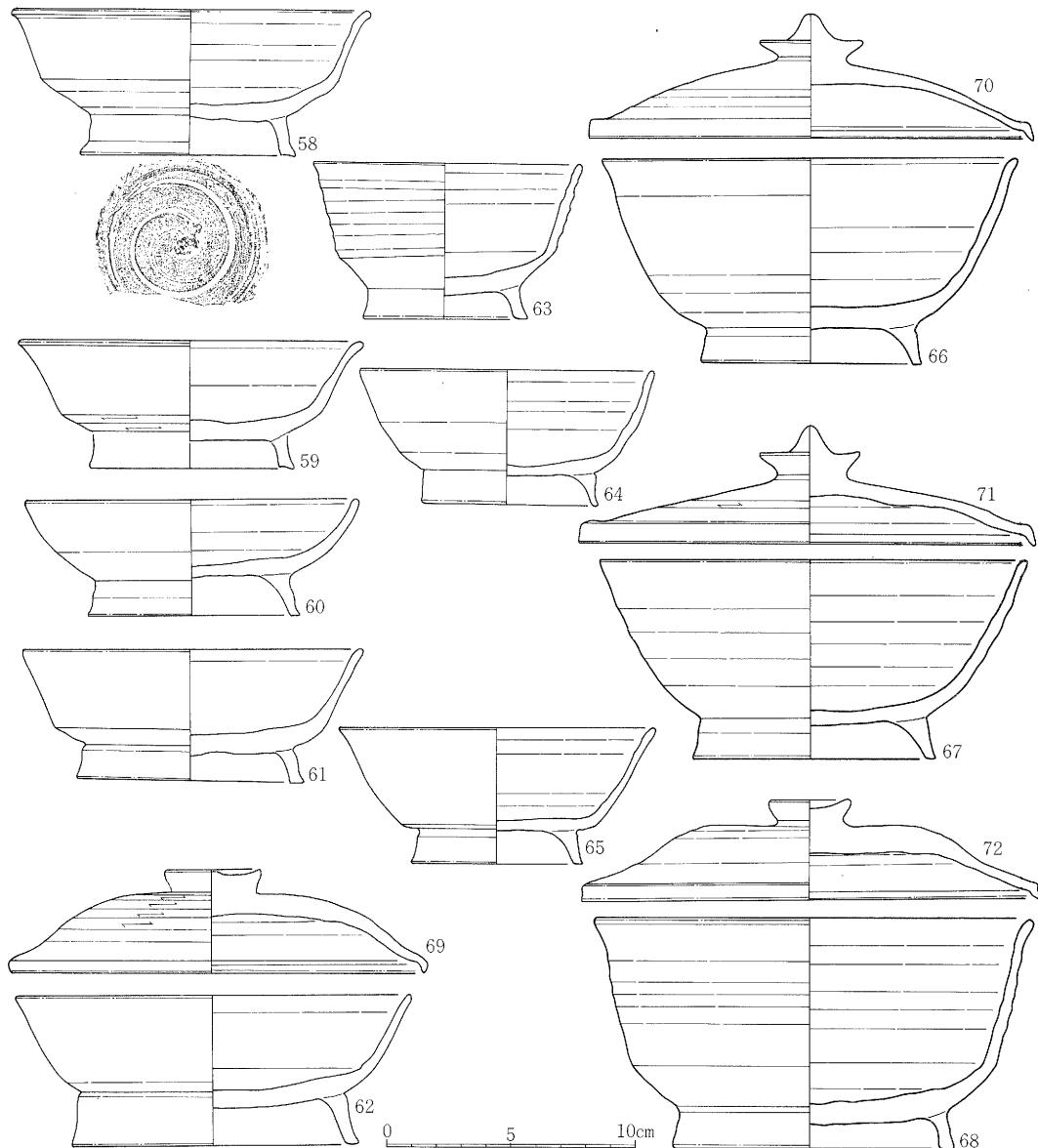
No.	層位	器種	分類	口径	底径	高さ	調 整	登録
23	床 直	須恵器・环	II	12.9	6.8	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	13
24	床 直	須恵器・环	II	12.8	7.2	4.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 火ダスキ 当て具痕?	14
25	1	須恵器・环	II	13.8	7.1	4.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	20
26	B-2	須恵器・环	II	13.6	7.4	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	23
27	C-2	須恵器・环	I	14.0	8.0	4.7	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色	49
28	B-2	須恵器・环	III	13.6	7.7	3.8	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	21
29	C-2	須恵器・环	II	10.2	5.7	4.8	内外:ロクロナデ 底:回へラケズリ 灰白色	48
30	不 明	須恵器・环	II	13.9	7.9	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り+ゆるいナデ	34
31	B-2	須恵器・环	II	14.1	7.5	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	50
32	B-2	須恵器・环	III	14.2	8.6	4.7	内外:ロクロナデ 底:ヘラケズリ 灰白色 火ダスキ	15
33	B-2	須恵器・环	III	14.4	7.9	4.7	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	26
34	C-1	須恵器・环	II	14.0	7.0	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	44
35	B-2	須恵器・环	II	13.8	8.2	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	31
36	B-2	須恵器・环	II	14.2	8.0	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	43
37	A-2	須恵器・环	II	13.3	7.0	3.5	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色	30
38	P-2	須恵器・环	III	12.1	7.6	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	22

第13図 S I-173住居跡出土遺物 (3)



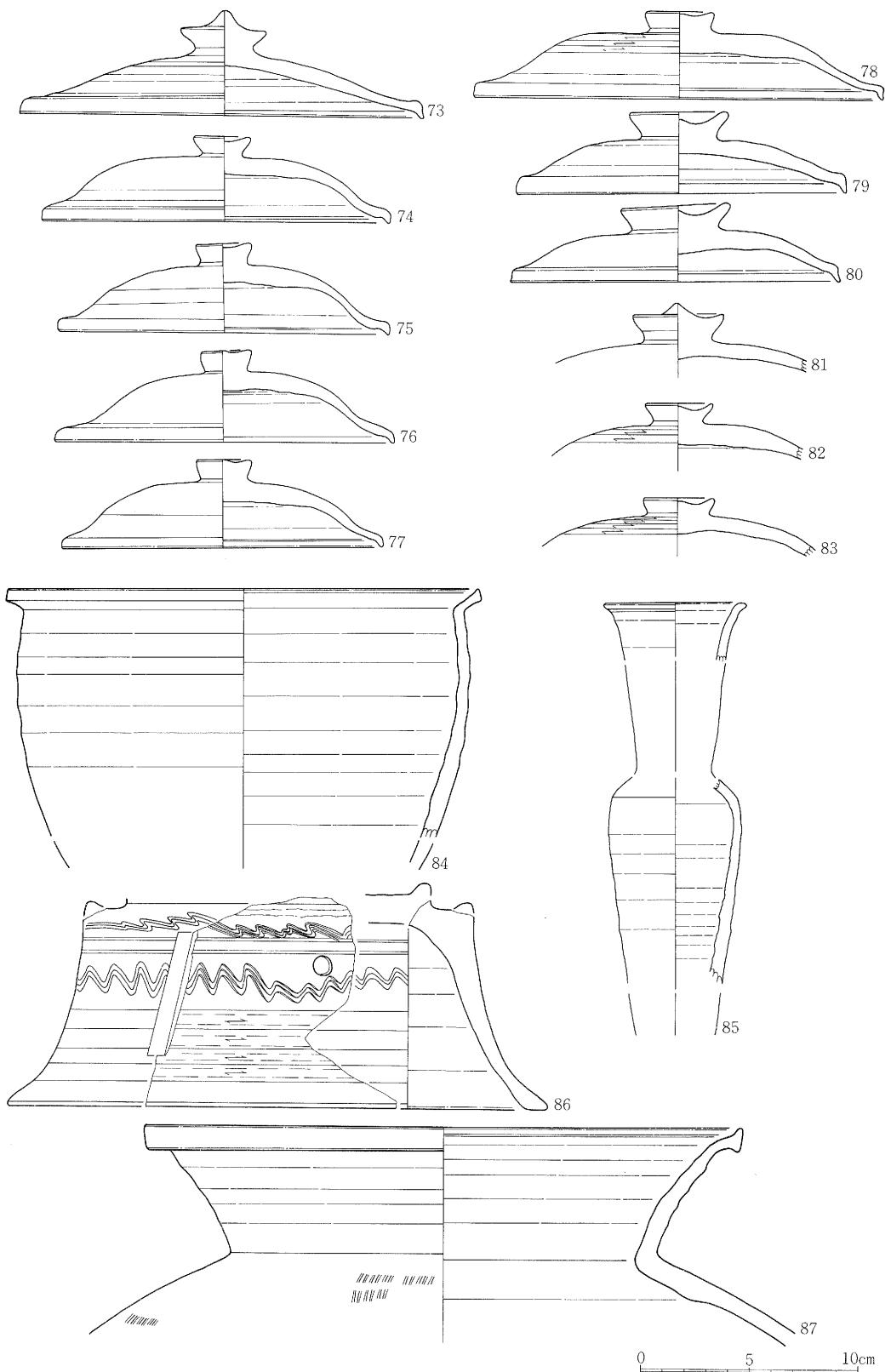
No.	層位	器種	分類	口径	底径	高さ	調	整	登録
41	C-2	須恵器・环	II	13.2	7.3	3.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り		32
42	B-2	須恵器・环	I	14.3	8.0	3.6	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り		35
43	B-2	須恵器・环	I	15.0	7.4	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色 粘土シマ		37
44	D-2	須恵器・环	I	14.3	8.4	3.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色		38
45	2	須恵器・环	III	14.7	8.8	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り		46
46	B-2	須恵器・环	I	14.6	8.0	3.7	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色 粘土シマ		41
47	B-2	須恵器・环	I	14.7	8.5	3.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質		33
48	C-2	須恵器・环	I	15.0	8.5	3.8	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色		36
49	B-2	須恵器・环	I	14.7	8.3	3.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色 粘土シマ		40
50	D-2	須恵器・环	II	13.7	8.0	4.5	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色 火ダスキ		24
51	A-2	須恵器・环	II	12.5	6.8	3.8	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 灰白色		28
52	C-2	須恵器・环	III	14.3	7.7	4.7	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 火ダスキ		29
53	床 直	須恵器・双耳环	B	12.3	7.5	6.6	内外:ロクロナデ 底:回へラケズリ		63
54	床 直	須恵器・双耳环	B	11.9	7.3	6.6	内外:ロクロナデ 底:回へラケズリ		62
55	B-2	須恵器・双耳环	A	12.0	6.7	6.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り		64
56	床 直	須恵器・蓋		13.2			内外:ロクロナデ+回へラケズリ	蓋B	
57	床 直	須恵器・蓋		13.5			内外:ロクロナデ+回へラケズリ	蓋A	

第14図 S1-173住居跡出土遺物 (4)

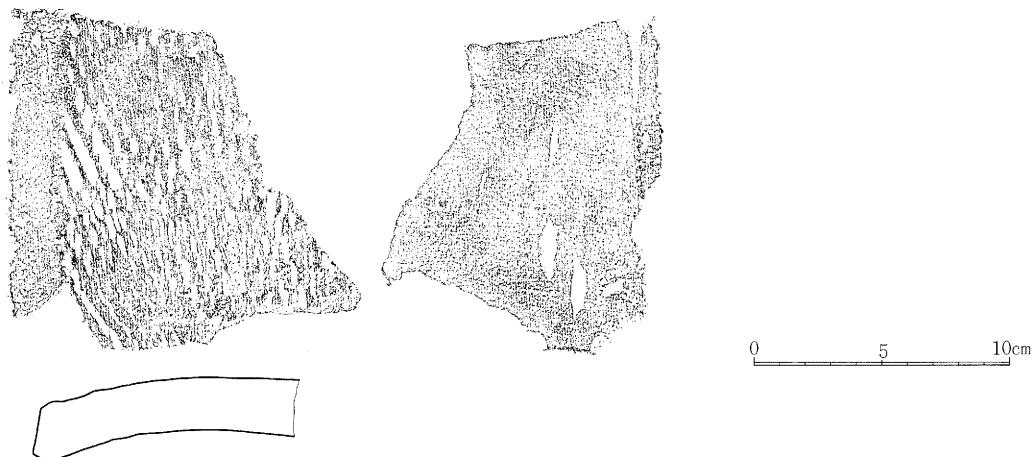
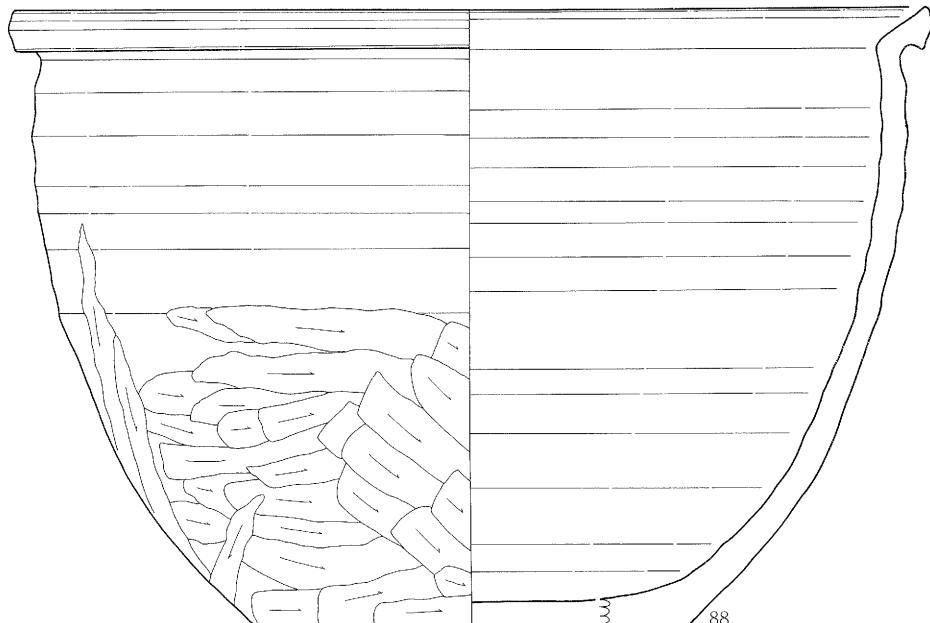


No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	高さ	調	整	登録
58	D-2	須恵器・高台付环	III B	14.6	8.7	6.0	内外:ロクロナデ 灰白色		53
59	A-2	須恵器・高台付环	III B	14.1			外:ロクロ+回ラケズリ 灰白色		54
60	C-2	須恵器・高台付环	III A	13.6	8.5	4.7	内外:ロクロナデ 軟質 赤褐色		51
61	A-1	須恵器・高台付环	III B	13.8	9.2	5.4	内外:ロクロナデ		52
62	D-2	須恵器・高台付环	II A	16.1	11.7	6.1	内外:ロクロナデ 火ダスキ		55
63	B-2	須恵器・高台付环	WB	10.8	6.7	6.3	内外:ロクロナデ 底:回ケズリ+ナナデ		58
64	床	須恵器・高台付环	WA	12.0	7.2	5.5	内外:ロクロナデ 軟質 粘土シマ状		56
65	床	須恵器・高台付环	WB	12.8	7.0	5.5	内外:ロクロナデ		57
66	床 直	須恵器・高台付环	I A	16.9	9.0	8.3	内外:ロクロナデ 軟質 粘土シマ状		61
67	A-2	須恵器・高台付环	I A	17.2	9.7	8.1	内外:ロクロナデ 軟質 赤褐色 粘土シマ状		60
68	D-1	須恵器・高台付环	I B	17.8	11.3	9.3	内外:ロクロナデ 灰白色		59
69	B-2	須恵器・蓋	II	16.7		4.2	外:回ケズリ+ロクロナデ 内:ロクロナデ 火ダスキ		10
70	B-2	須恵器・蓋	I	18.0		5.0	外:回ケズリ+ロクロナデ 内:ロクロナデ 粘土シマ状		2
71	B-2	須恵器・蓋	I	18.0		4.9	外:回ケズリ+ロクロナデ 内:ロクロナデ 粘土シマ状		1
72	1	須恵器・蓋	II	18.5		4.1	外:回ケズリ+ロクロナデ 内:ロクロナデ		12

第15図 SI-173住居跡出土遺物 (5)



第16図 SI-173住居跡出土遺物 (6)



No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	高さ	調		登録
							外:	内:	
73	A-1	須恵器・蓋	I	18.8		4.9	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ 粘土シマ状	3
74	床	須恵器・蓋	II	16.2		4.0	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	9
75	B-2	須恵器・蓋	II	15.4		4.1	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	7
76	床 直	須恵器・蓋	II	15.8		4.3	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	6
77	床	須恵器・蓋	II	15.0		4.1	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	8
78	床	須恵器・蓋	II	19.0		4.1	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	11
79	B-2	須恵器・蓋	III	15.3		3.8	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	4
80	床 直	須恵器・蓋	III	15.3		3.7	回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ 赤褐色	5
81	床	須恵器・蓋	I				回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	蓋C
82	床	須恵器・蓋	II				回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	蓋D
83	床	須恵器・蓋	II				回ヶズリ+ロクロナデ	ロクロナデ	蓋E
84	C-2	須恵器・鉢		22.0			内外:ロクロナデ		65
85	B-2	須恵器・長頸壺		6.7			内外:ロクロナデ		83
86	B-2	須恵器・円面碗			25.0		回ヶズリ+ロクロ 内:ロクロ	円・短冊形 3条クシ彫	82
87	B-2	須恵器・甕		27.7			ロクロナデ	体:タタキ+ナデ	66
88	2	須恵器・鉢		36.0	17.0	24.4	外:ロクロナデ+ケズリ	内:ロクロナデ	80

第17図 S1-173住居跡出土遺物 (7)

〔柱穴〕床面からはいくつかのピットが検出されているが、柱穴と断定されるものはない。

〔床面の施設〕床面中央南寄りの部分から径約1.2m、深さ20cmの円形の土壙が検出された。焼面などは伴わず、性格は不明である。

〔出土遺物〕2層を中心として床面及び堆積土1層の下面から図示できるものだけでも88点にもおよぶ土師器（壺・甕）、須恵器（壺・高台付壺・双耳壺・甕・鉢・蓋・長頸壺）、円面硯や瓦が出土している。これらの遺物は床面～1層下面までかなり濃密に分布するのに対し、3.4層には少なく、出土状態も倒立したもの横位のものなど様々で、しかも床面と上層の遺物間には接合関係の見られるものもある。このような状況はこれまで検出されているSI-04住居跡（多賀城跡調査研究所：1978）やSI-54住居跡（菅原：1989）のように火災によって消失し、原位置をそのまま保って出土したものとは異なり、SI-123住居跡（菅原：1990）などのように住居が廃棄され壁際の堆積が進行した後、炭化物などと共に一括投棄されたものと考えられる。

SI-174号住居跡（第18～20図）

〔遺構の確認〕調査区北西寄り、SB-175の西約10mの位置にあり、地山ローム面で確認された。

〔重複〕住居跡中央の床面下からSB-141号建物跡の柱穴が検出されており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕住居の平面形は東西に長い長方形で、規模は、南北約3.3m、東西約4.1mである。

〔堆積土〕3層に大別される。いずれも自然流入土で、1は黒褐色の軟らかい土で住居中央付近に、2は褐～黄褐色のシルトで床面全体に厚く、3は暗褐～黒褐色のシルトで壁際に堆積している。2は床面近くで炭化物を非常に多く含む部分がある。

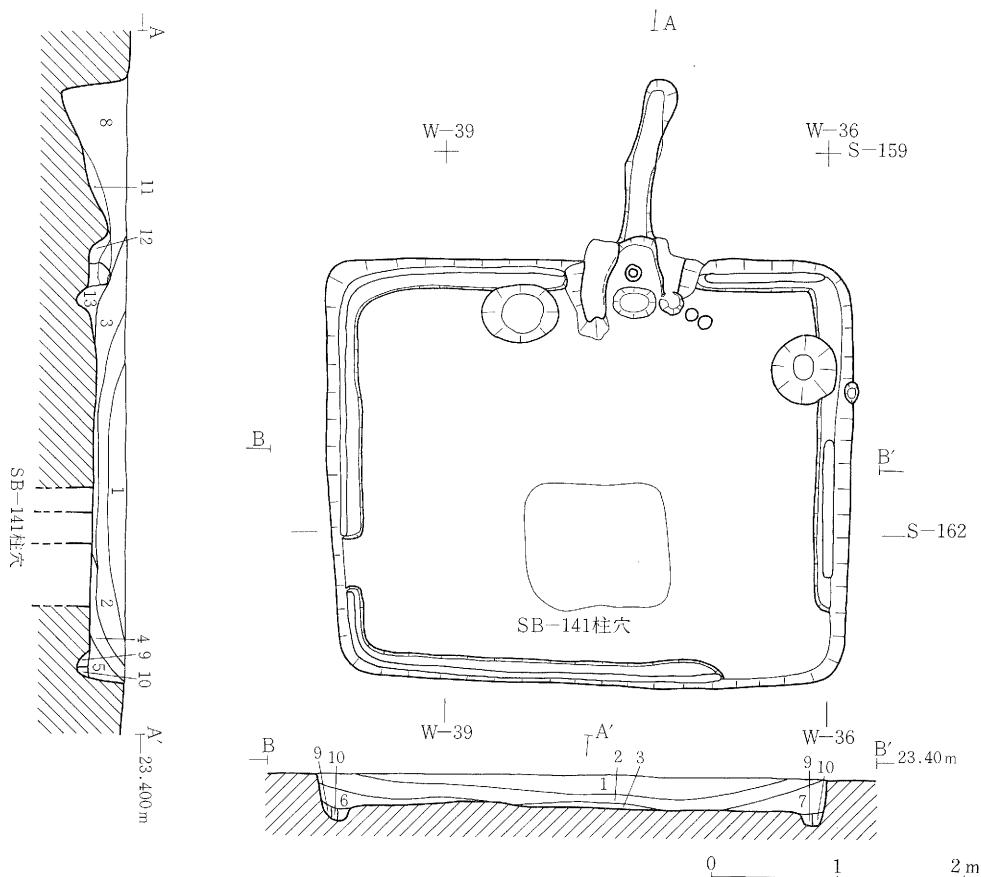
〔床面・壁〕地山面を床としている。ほぼ平坦で、中央部分を中心に径2mほどの範囲で硬くしまった場所がある。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。残存状況は良好で、壁高は床面から約30cmある。

〔カマド〕北壁中央部に付設されており、燃焼部奥壁は住居北壁を若干掘り込んで作られている。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部の左側壁は白色の粘土を積み上げて、右側壁は焚き口部に土師器甕を伏せて据え、それに粘土を貼り付けて構築している。底面は焚き口部に楕円形の掘り込みがある他はほぼ平坦で、約15cmほどの段（奥壁）をへて煙道部へと続く。また底面の中央部には土師器甕を伏せて据えた支脚がある。煙道部は長さ約1.6mあり、底面は先端に向かって深くなっていく。

〔柱穴〕床面から2つのピットが検出されているが、柱穴と断定できるものはない。

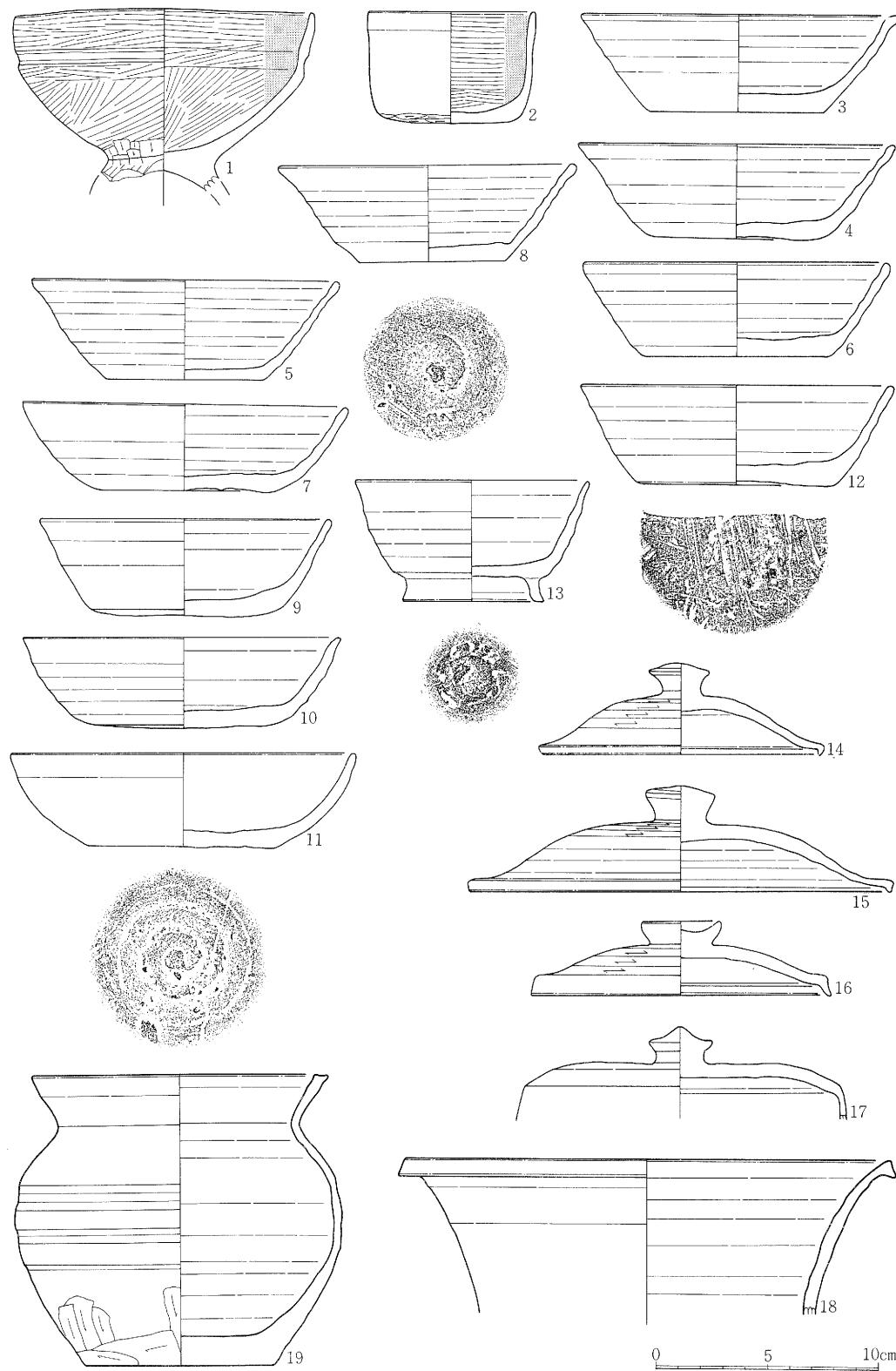
〔周溝〕 カマドの部分を除くほぼ住居全体の壁直下から検出されているが、南東隅と西側で部分的に途切れる。幅30~40cm、深さ約10cmで、断面形はU字形を呈している。また、周溝内の壁際には幅5cmほどで帯状に褐~暗褐色土が巡る部分もあり、壁材の痕跡と考えられる。したがって本住居における周溝は暗渠、排水などの目的よりも壁材を押さえるために掘られたものと考えられる。

〔出土遺物〕 床面及び堆積土から多くの遺物が出土している。これらの多くは2層の炭化物層からまとまって出土したもので、SI-173などと同様に住居廃棄後に堆積したものと考えられる。

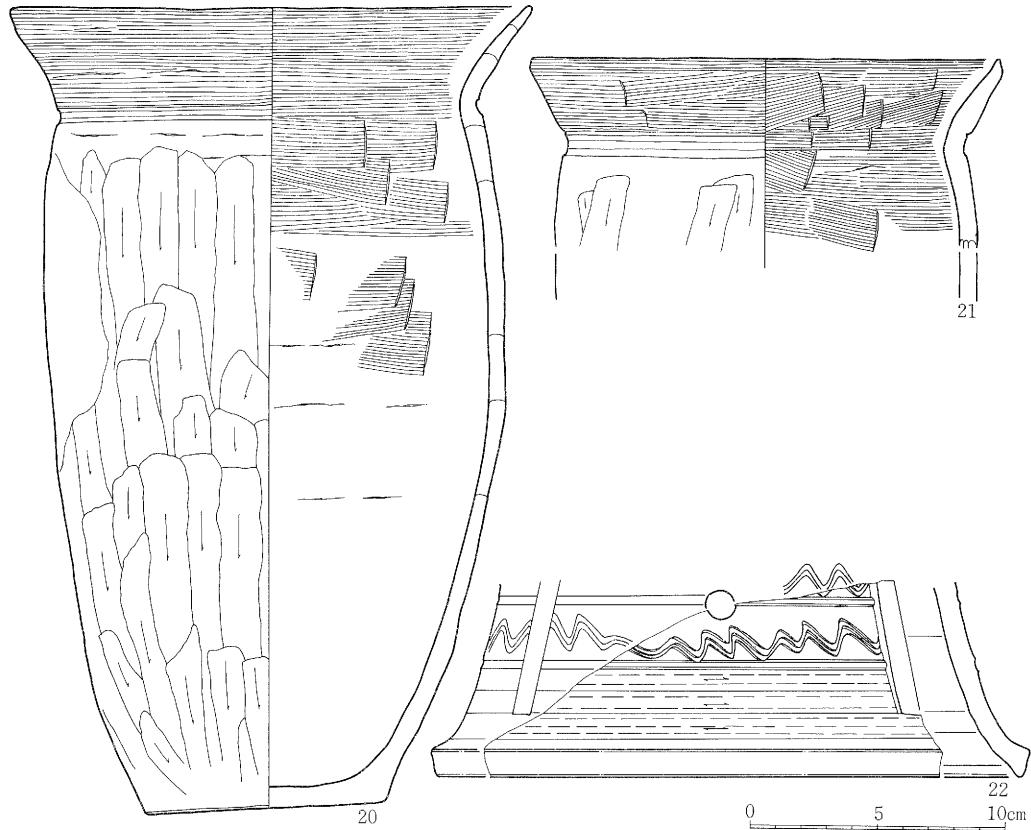


層No	上色	土性	特徴
1	10YR 5/2 黒褐色	シルト	しまりなく、ハサハサする
2	10YR 4/2 黄褐色	シルト	地山粒を多く含む
3	10YR 4/2 黄褐色	シルト	地山粒を若干含む、炭化物を少し含む
4	10YR 4/2 黄褐色	シルト	炭化物を非常に多く含む
5	10YR 3/2 黑褐色	シルト	地山粒や炭化物を少し含む
6	10YR 3/2 暗褐色	シルト	
7	10YR 3/2 黑褐色	シルト	白色粘土粒や炭化物を少し含む
8	10YR 3/2 黑褐色	シルト	カマド煙道部堆積土
9	10YR 3/2 暗褐色	シルト	崩壊埋土
10	10YR 3/2 黄褐色	シルト	壁材痕跡
11	10YR 3/2 黄褐色	シルト	燃土を若干含む
12	10YR 3/2 暗褐色	シルト	燃土・炭化物を多量に含む カマド内堆積土
13	10YR 3/2 暗褐色	シルト	燃土・炭化物を多量に含む カマド内堆積土

第18図 SI-174住居跡



第19図 S1-174住居跡出土遺物(1)



No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	高さ	調査	登録
1	床	土師器・高台付环	II	13.7		8.3	外:ヘラミガキ、ヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	1
2	A-1	土師器・环	I	7.6	5.2	5.1	外:ロクロナデ+ヘラケズリ 内:ヘラミガキ+黒色処理	2
3	床	須恵器・环	II	14.4	7.8	4.5	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り+ナデ 灰白色	6
4	床	須恵器・环	III	14.3	8.0	4.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	3
5	床	須恵器・环	II	14.0	7.0	4.6	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 次ダスキ	7
6	床	須恵器・环	II	13.9	8.2	4.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り+ヘラケズリ	9
7	床	須恵器・环	I	14.8	7.8	4.0	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色	10
8	カマド	須恵器・环	II	13.5	6.7	4.4	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 次ダスキ	5
9	C-2	須恵器・环	III	13.3	8.5	4.4	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り+ナデ	4
10	A-2	須恵器・环	III	14.4	8.0	4.2	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	8
11	D-2	須恵器・环	I	15.6	8.4	4.3	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り 軟質 赤褐色	11
12	D-2	須恵器・环	III	14.2	8.5	4.5	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り+ヘラケズリ 次ダスキ	12
13	B-1	須恵器・高台付环	IV A	10.7	6.4	5.5	内外:ロクロナデ 底:回へラ切り	13
14	床	須恵器・蓋	II	12.5		4.2	外:ロクロナデ+回ケズリ 内:ロクロナデ	14
15	C-1	須恵器・蓋	II	19.2		4.8	外:ロクロナデ+回ケズリ 内:ロクロナデ 軟質 赤褐色	15
16	C-2	須恵器・蓋	III	13.5		3.3	外:ロクロナデ+回ケズリ 内:ロクロナデ 赤褐色	16
17	A-2	須恵器・蓋	II	14.9		4.2	外:ロクロナデ+回ケズリ 内:ロクロナデ 赤	17
18	床	須恵器・甕		22.0			内外:ロクロナデ	18
19	床	須恵器・甕		13.4	8.5	13.2	外:ロクロナデ+ヘラケズリ 内:ロクロナデ	19
20	陶石英口	土師器・甕	II A	20.6	9.5	32.1	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヘラナデ	22
21	B-2	土師器・甕	II A	18.4			外:ヘラナデ・ヘラケズリ 内:ヘラナデ	21
22	2	円面碗		22.7			外:回ケズリ・ロクロ 3条の擦痕 円・短冊形の窓	23

第20図 SI-174住居跡出土遺物 (2)

SI-179号住居跡（第21図）

〔遺構の確認〕 調査区中央西寄り、SB-175建物跡南西隅から約5mの位置にあり、地山ローム面で確認された。全体的に残存状況は悪く、西辺は周溝が確認されたのみである。

〔重複〕 住居跡南壁の部分でSD-181円形周溝を切っており、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕住居の平面形は隅の丸い正方形を呈し、規模は一辺約 2.6mである。

〔堆積土〕黒褐色のシルトが床面全体に薄く堆積しているのみである。

〔床面・壁〕地山面を掘り窪めた後に暗褐～黒褐色土を10～15cm埋め込んで床としている。床面はほぼ平坦である。壁は西壁以外の部分が検出された。床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい東壁で約 5 cm ある。

〔カマド〕東壁南東隅にあり住居東壁の部分を掘り込んで作っている。燃焼部側壁は地山を掘り込んだ壁をそのまま利用し、天井部はその上に粘土を積み上げて構築していたものと考えられる。底面は船底状を呈し、奥壁に向かって浅くなる。

〔柱穴〕床面から 2 つのピットが検出されているが、柱穴と断定できるものはない。

〔周溝〕西辺の部分からのみ検出された。幅約20cm、深さ 5 cm で、断面形は U 字形を呈している。壁材の痕跡等は検出されなかった。

〔床面の施設〕住居床面の中央部からは、鍛治遺構の可能性もある40×60cm ほどの範囲で非常に硬く焼けしまった焼面が検出された。また、カマド焚口左側の位置からは、長軸約80cm、短軸約60cm、深さ約55cm の楕円形の土壙が検出された。埋土は暗褐～黒褐色のシルトで木炭や焼土粒を多量に含んでおり、上記の施設から投げ込まれたものと考えられる。

〔出土遺物〕堆積土の残りも悪く遺物の量は少ない。床面及び P-1 から土師器（甕）、須恵器（坏・蓋）が出土している。

SI-177号住居跡

〔遺構の概要〕遺構の確認のみで、精査は行っていない。調査区のほぼ中央、SB-175建物跡の南側約 5 m に位置し、北に隣接する SI-172 住居跡と、西に隣接する SI-178 との間隔はそれぞれ約 3 m である。地山面で確認された。住居の平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は東西約 3.4m、南北約 2.6m である。カマドは南壁南東隅にあり、奥壁は住居南壁の部分を掘り込んで作っている。燃焼部側壁は地山を掘り込んだ壁を利用して、それに粘土を積み上げて構築していたものと考えられる。堆積土中から土師器（甕）須恵器（坏・高台付坏）が出土している。

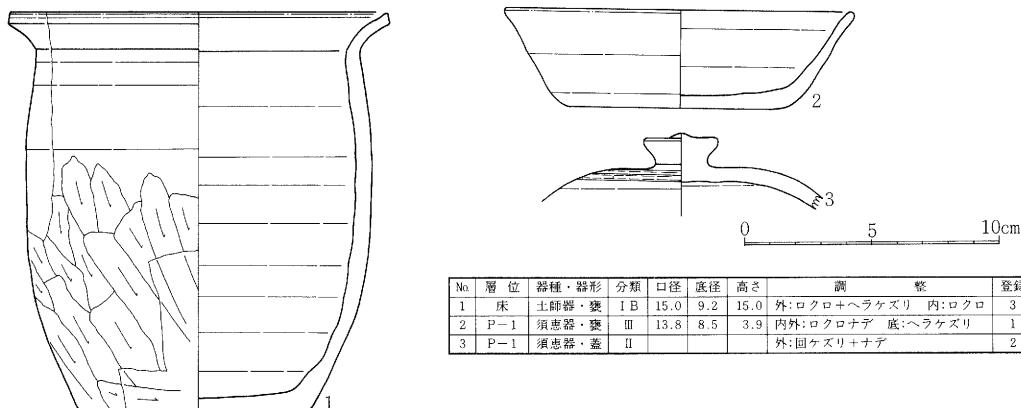
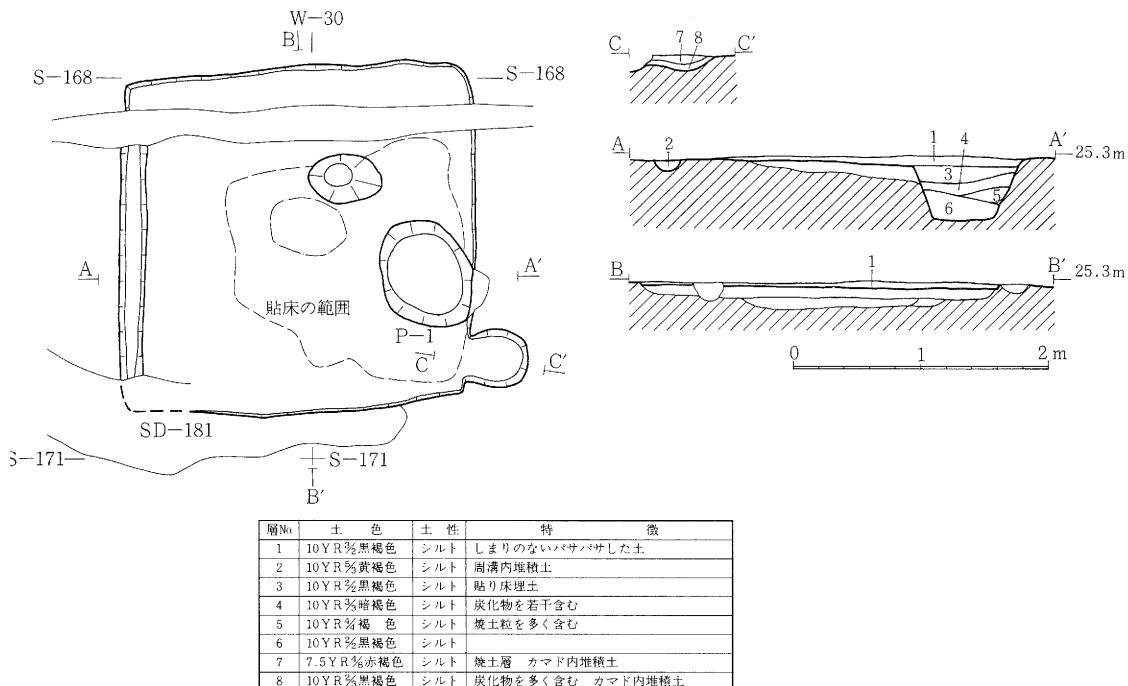
SI-178号住居跡

〔遺構の概要〕遺構の確認のみで、精査は行っていない。調査区のほぼ中央、SB-175建物跡の南側約 5 m に位置し、北に隣接する SI-173 住居跡と、東に隣接する SI-177 との間隔はそれぞれ約 3 m である。地山面で確認された。住居の平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は東西約 3.8m、南北約 2.4m である。カマドは住居南東隅にあり、奥壁は住居南壁の部分を掘り

掘り込んで作っており、燃焼部側壁は地山を掘り込んだ壁をそのまま利用している。堆積土中から土師器・須恵器の小片が出土している。

SI-180号住居跡

〔遺構の概要〕 遺構の確認のみで、精査は行っていない。調査区北側、SB-175建物跡の北側柱列と重複する位置にある。SB-175建物跡の柱穴（P10）を切っており、これよりも新しい。南壁の一部のみ確認されたもので、住居の大部分は調査区外へとのびる。形状や、規模などは不明である。



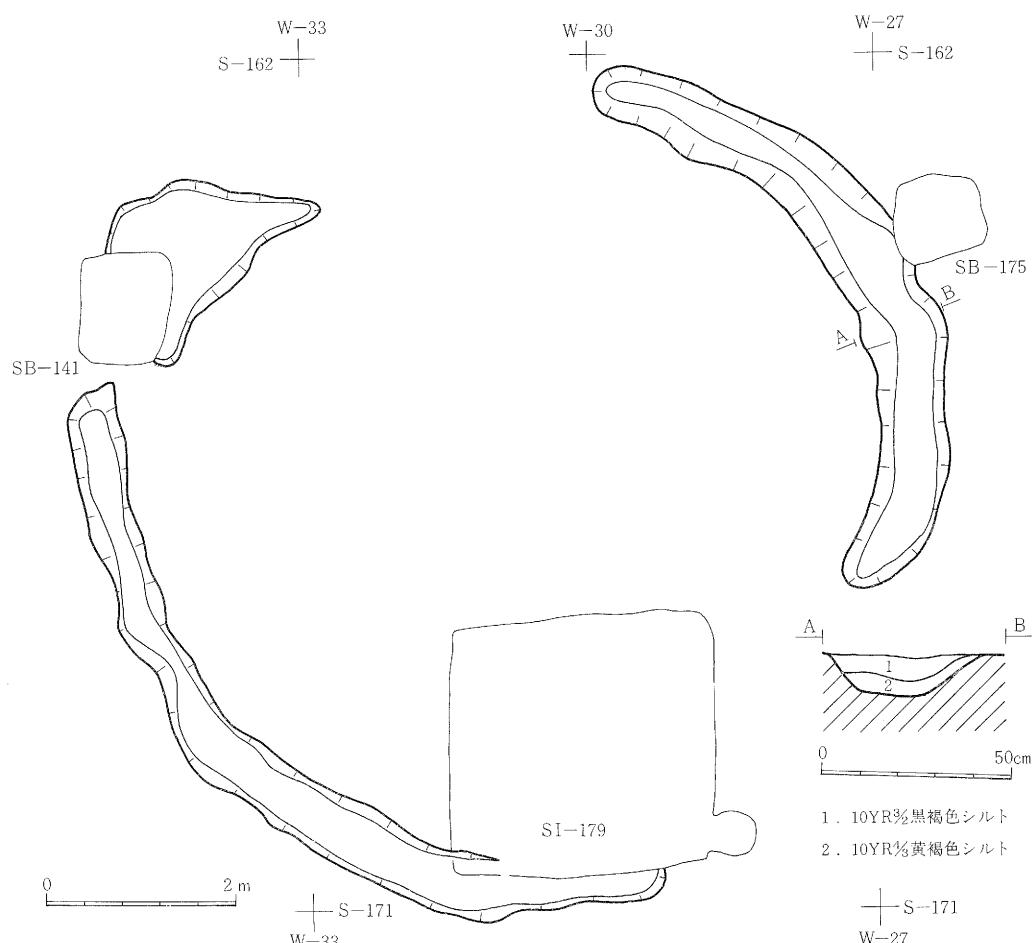
第21図 SI-179住居跡と出土遺物

SD-181円形周溝墓（第22図）

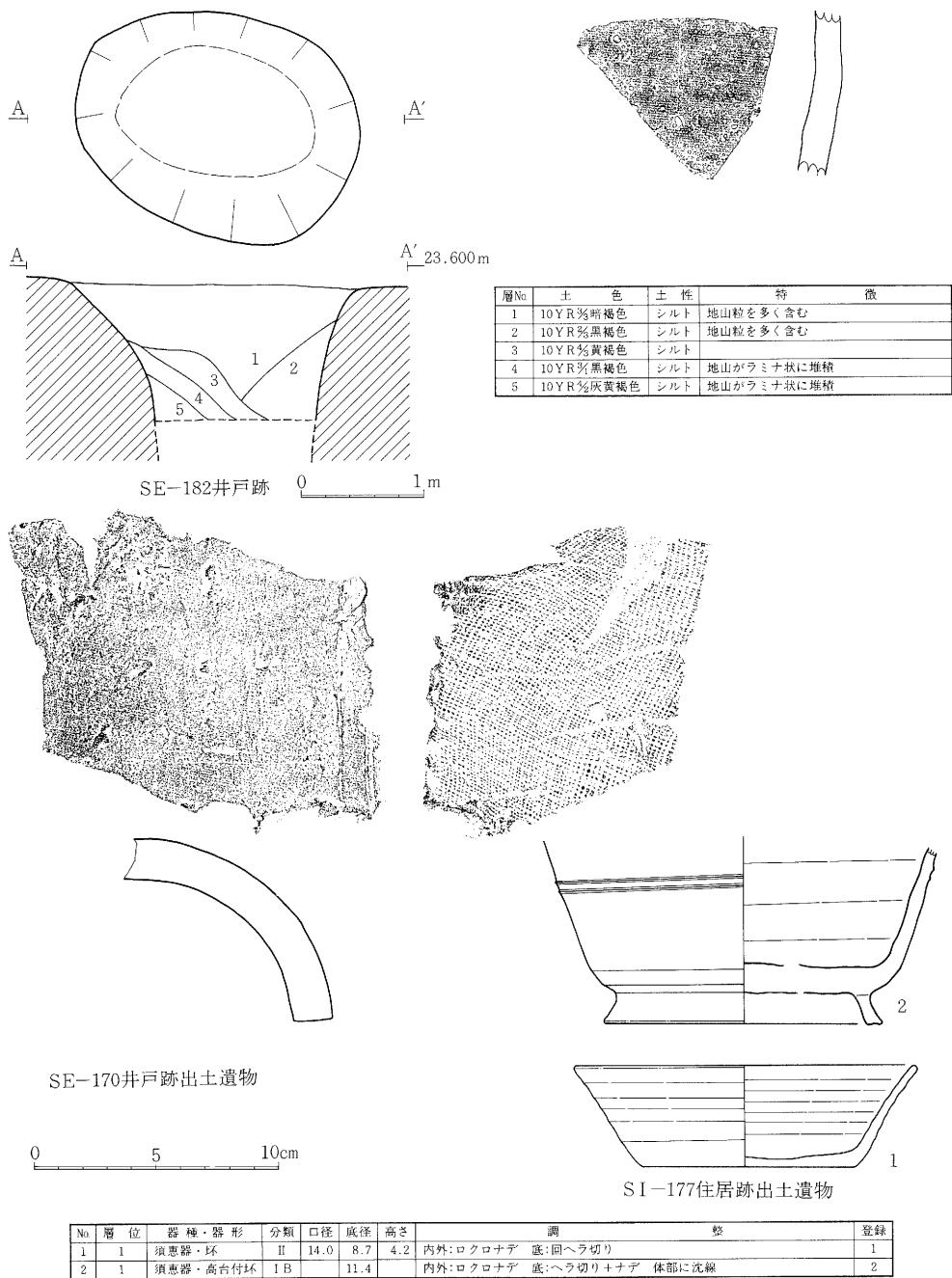
調査区北西部のSI-173住居跡とSI-174住居跡のほぼ中間に位置し、地山面で検出された。

SI-179住居跡、SB-141建物跡、SB-175建物跡とそれぞれ重複し、これらよりも古い。周溝の直径は溝の外側で計測すると約9mあり、南東部と西北部の部分は途切れている。溝の幅は60~120cmで、深さは5~15cmである。断面形は皿状で、底面には若干凹凸が見られた。堆積土は暗~黒褐色のしまりのない土で自然流入土である。遺物は認められなかった。

このような円形周溝はこれまでの調査でSD-102, SD-138, SD-163などいくつか検出されており、とくにSD-163では主体部と考えられる方形の土壙が、溝で囲まれた部分の中央から検出されており、円形周溝墓であったと考えられている。SD-181では土壙など主体部と考えられるような施設は検出されていないが、SD-163などと同様に円形周溝墓であったと考えられる。



第22図 SD-181円形周溝墓



第23図 その他の遺構と出土遺物

SE-170井戸跡

SI-171住居跡と完全に重複しており、この住居の堆積土1層の上面で検出された。井戸側板などは検出されていないが形状や規模から井戸跡であると考えられる。平面形はほぼ円形で、規模は東西約3.3m、南北2.8mある。確認面から約60cm掘下げたのみで完掘はしておらず深さは不明である。SI-171の堆積土2層である10世紀前半降下とされる灰白色火山灰を切っていることからこれ以降のものである。

SE-182井戸跡（第23図）

調査区北東、SB-175建物跡の東側約10mの位置にあり、地山面で確認された。井戸側板などは検出されていないが形状や規模から井戸跡と考えられる。平面形は橢円形で、規模は長軸約2.1m、短軸約1.5mある。確認面から約1.0m掘下げた時点で湧水が激しく完掘はしておらず深さは不明である。埋土中から、常滑産と考えられる中世陶器が1点検出されており、中世以降の井戸と考えられる。



第24図 第16次調査区位置図

第16次調査（第24～26図）

本調査は、町道大堀線の整備事業に伴う発掘調査である。この町道は総延長が約520mあり、遺跡北西部の道祖神神社から国道4号線へ通じている。整備事業の目的は、これを拡張・舗装しようとするものである。道路の工事は土盛りにより遺構面にまで及ばないように設計され、

遺構の現状保存がなされることから、遺構の確認調査のみを行った。また、本道は現在も利用されていることから、生活に及ぼす影響を最小にとどめるため、道路の拡張部分と地権者の協力を得て道路の隣接地の畠地について行った。

調査は東からA～Hまで8本のトレンチを任意に設定して行った。

A トレンチ

溝4条が検出されている。これらの中でSD-201溝跡、SD-202溝跡は台地東端の部分で検出された。幅は3.5～4.0mで台地の落ち際にそって南北に延びる。堆積土中に10世紀前半に降下した灰白色火山灰が認められ、出土遺物には土師器・須恵器・瓦がある。また、この溝が検出された100mほど北側には、まだ完全に埋まり切っていない大溝とそれに並行する土塁が認められ伊治城の北辺外郭施設と考えられているが、今回検出された2条の溝はこれに連続する東辺外郭施設であると考えられる。SD-183.184は古代以降のものと考えられる。

B・C トレンチ

Bトレンチから竪穴住居跡1軒が検出されている。住居の南東隅の部分のみ検出されたもので全体規模などは不明である。

D トレンチ

Dトレンチから竪穴住居跡1軒と溝1条が検出されている。住居の北東隅の部分が検出されたものである。溝は東西に延びるもので、堆積土の状況から古代以降のものと考えられる。

E トレンチ

Eトレンチから竪穴住居跡1軒検出されている。住居の南西隅の部分のみ検出されたもので全体規模などは不明である。

F トレンチ

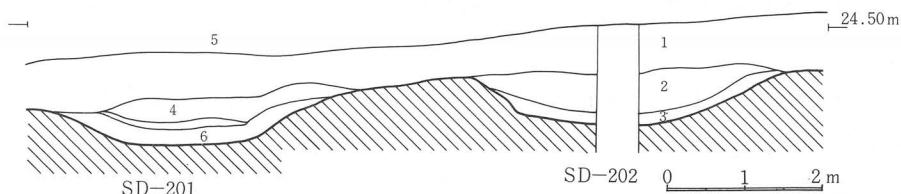
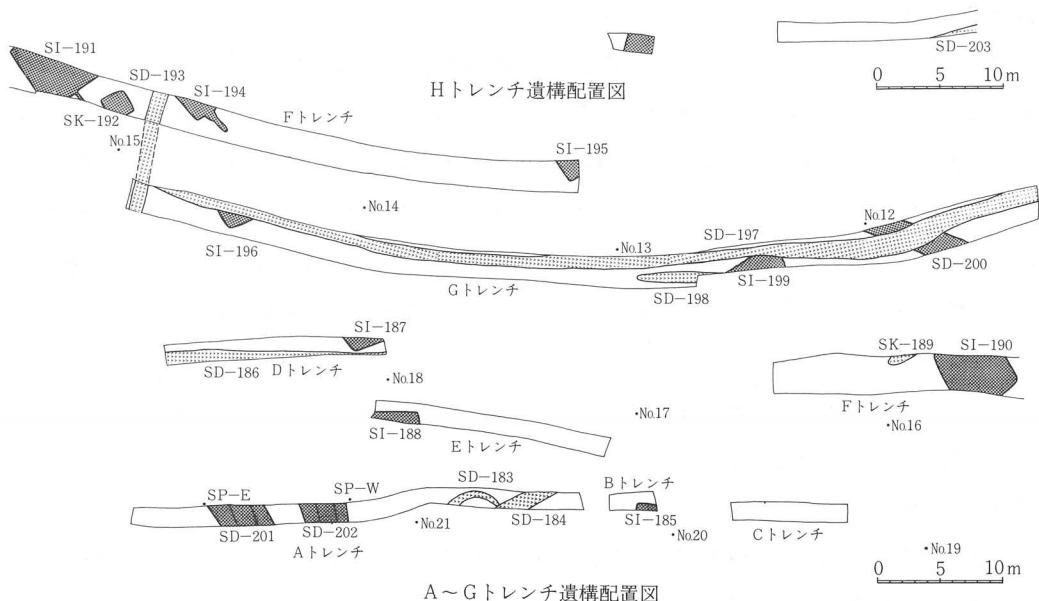
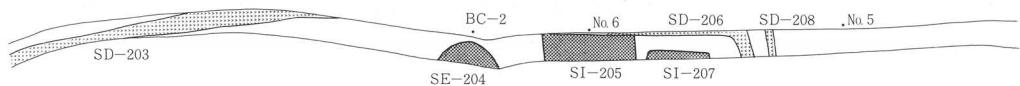
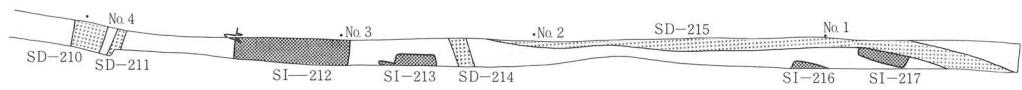
Fトレンチからは竪穴住居跡4軒、土壙2基、溝1条が検出されている。SI-190.191は一辺約4mの方形の住居で、SI-191.194からはカマドが検出されている。SK-189は溝状の、SK-192は一辺約1.5mの方形の土壙である。

G トレンチ

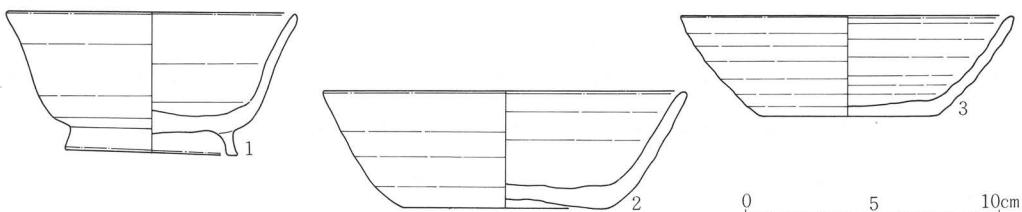
Gトレンチからは竪穴住居跡2軒、溝4条が検出されている。SI-196は北東隅が、SI-199は南西隅が検出されたもので全体規模などは不明である。溝は堆積土の観察や重複、出土遺物からSD-200以外は古代、それ以外は近世以降のものと考えられる。

H トレンチ

Hトレンチは長さ200mにおよぶもので、竪穴住居跡7軒、溝7条、井戸1基が検出されている。これらの住居の中でSI-205は東西7m、SI-212は東西9mとこれまで伊治城内で検出された竪穴住居跡の中ではきわめて大きなものである。また、SI-205からは堆積土中に非常に

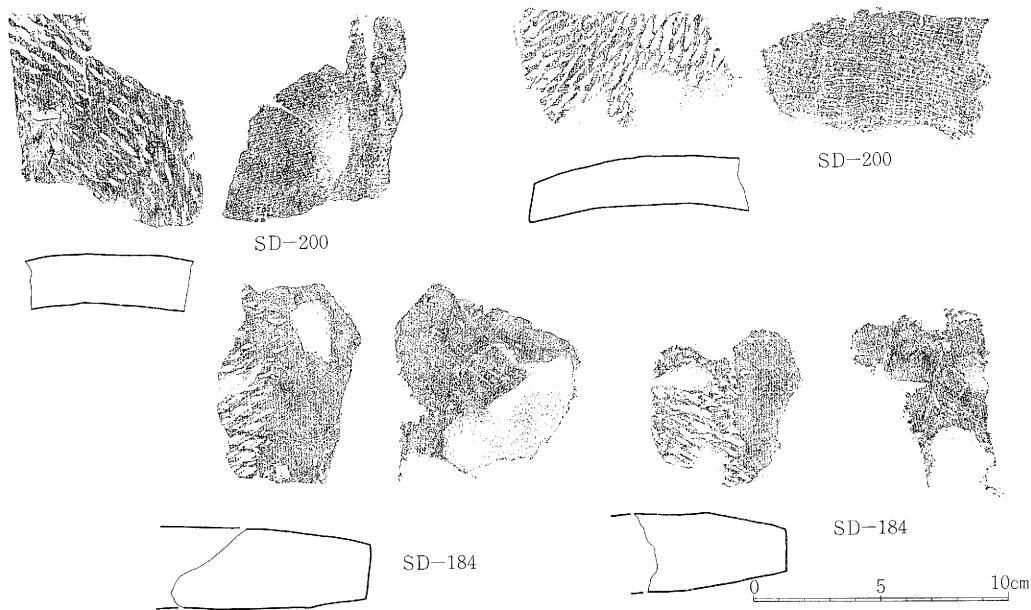


層No	土色	土性	特徴
1	10YR 5%灰黄褐色	シルト	表土
2	10YR 5%黄褐色	シルト	地山粒を多く含む SD-202堆積土
3	10YR 5%暗褐色	シルト	SD-202堆積土
4	10YR 5%黄褐色	シルト	しまりなく、バサバサしている SD-201堆積土
5	10YR 5%灰白色	シルト	灰白色火山灰 SD-201堆積土
6	10YR 5%暗褐色	砂質シルト	砂粒、小レキを多く含む



No.	遺構	器種・器形	分類	口径	底径	高さ	調	整	登録
1	SE-204	須恵器・高台付环	IVB	11.6	8.0	4.7	内外:ロクロナデ 底:回ヘラケズリ		2
2	SE-204	須恵器・环	III	13.2	6.7	4.0	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り		1
3	SI-213	須恵器・环	II	14.4	8.0	4.7	内外:ロクロナデ 底:ヘラ切り		1

第25図 第16次調査区遺構配置図と出土遺物



第26図 第16次調査区出土遺物 (2)

多くの炭化物が認められており、火災住居である可能性もある。溝は堆積土の観察や重複、出土遺物からすべて近世以降のものと考えられる。井戸跡は直径約5mの円形で、堆積土中に灰白色火山灰が認められる。8世紀末頃の須恵器坏、高台付坏が出土している。

IV 考察

ここでは、まず出土した遺物の分類と年代について述べ、続いて検出された遺構の全体的構成や配置について検討し、最後に竪穴住居跡に関する問題点について考えてみたい。

① [遺物について]

本調査で出土した土器で図示できたものは合計約 130点ほどあり、その中で SI-173・SI-174住居跡から出土したものが 111点を占めている。ここでは多量の土器を出土した SI-173 の遺物を中心に検討を加えていくこととする。

○ 出土土器の特徴と分類

SI-173出土土器のうち図示したものの総計は87点で、その内訳は土師器14（壺8・甕6）須恵器73（壺38・高台付壺11・蓋17・双耳壺3・甕1・鉢2・長頸壺1）となっている。以下これらの土器の特徴について記述し、分類する。

土師器壺には I. 製作にロクロを使用したもの（7個）と II. ロクロを用いないもの（1個）がある。I は体部が底部から内湾気味に立ち上がるものと、ほぼ直線的に立ち上がるものがある。体部の調整はすべて回転ヘラケズリで、口縁部直下まで削られているものや、ケズリ後にヘラミガキを加えているものもある。底部はいずれも回転ヘラケズリされており、切り離し技法のわかるものは 2 個で静止糸切りである。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。II は平底で、体部が底部から内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部へと続く。外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理である。

土師器甕も I. 製作にロクロを使用したもの（4個）と II. ロクロを使用しないもの（2個）があり、大形で長胴形を呈する A と小形の B とがある。IA はロクロ使用の大形の甕で「叩き」による成形後ロクロナデを行い、さらに体部下半にヘラケズリを加えたものである。IB はロクロ使用の小形の甕で外面の調整がロクロナデ+ヘラケズリのものと回転ヘラナデのものがあり、後者は底部に回転糸切り痕が残る。IA はロクロを用いない大形のもので、調整は外面がヨコナデ・ハケ目、内面がヨコナデ・ヘラナデである。IB はロクロを用いない小形のもので、調整は外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヨコナデ・ヘラナデである。

須恵器壺は合計38点あり、切り離しはすべて回転ヘラ切りである。器形の特徴や器面調整、焼成から、次のように分類される。

I. 口径に比して底径が大きくしかも器高が低い、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。軟質で、赤褐色の部分や粘土を練り上げた際の縞が残るものもある。

ロクロ調整は外面はフラットに仕上げられるが、内面は凹凸が外面よりシャープにみられる。火ダスキー認められるものはない。

II. I に比べて底径が小さく、しかも器高が高い。体部は底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたる。焼成は良好で、灰白色に仕上がっているものや、火ダスキーの認められるものがそれぞれ半数程度みられる。ロクロ調整は内外面ともにロクロ目がシャープにみられ、製作の段階で外面にヘラ状の工具を当てて成形した痕跡が残るものも認められる。また、切り離し後に底部周縁に軽いケズリやナデの再調整が加えられているものが13点中3点ある。

III. II と同様 I に比べて底径が小さく、しかも器高が比較的高い。体部は底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部にかけては直線的に外傾する。焼成は堅緻で、灰白色に仕上がっているものや、火ダスキーの認められるものがみられる。ロクロ調整は内外面ともにフラットに仕上げられ、ロクロ目がほとんど認められないものもある。切り離し後、底部に軽いケズリが加えられているものが1点ある。

須恵器高台付坏は合計11点あり、法量や器形から次のように分類できる。

I. 口径が17~18cmと大形で、しかも器高の高いものである。体部下半は丸みをもって立ち上がり、そのまま内湾気味に口縁部に至るものAと、体部下半に明瞭な稜をもつものBがある。焼成はBは良好なもの、Aはやや軟質で胎土が縞状のものもある。

II. 口径が16cm前後とやや大形で、しかも器高が低い皿状のものである。体部下半は丸みをもって立ち上がり、そのまま内湾気味に口縁部に至る。焼成は良好で火ダスキーが認められる。

III. 口径は14cm前後で、比較的器高は低い。体部下半は丸みをもって立ち上がり、そのまま内湾気味に口縁部に至るAと、体部下半に明瞭な稜をもつBがある。焼成はBは良好なもの、Aはやや軟質で赤褐色を呈する部分がある。

IV. 口径は12cm前後と小ぶりで、比較的器高の高いものである。体部下半は丸みをもって立ち上がり、そのまま内湾気味に口縁部に至るAと、体部下半に明瞭な稜をもつBがある。焼成はBは良好なもの、Aはやや軟質で胎土が縞状のものもある。

須恵器双耳坏は3点ある。口径は12cm前後でしかも器高が高く、器形的には高台付坏IVに類似する。体部下半に明確な稜をもつAと稜をもたないBがあり、前者には明瞭なロクロ痕がみられる。また、耳部も異なり、Aは鳥羽状でBは角柱状である。

須恵器蓋は全形のわかるものが12点ある。つまみの形や天井部の形や口縁端部から次のように分類される。

I. 宝珠形のつまみをもつもので、体部は天井から口縁部にかけて、ふくらみが少なくほぼ直線的である。口縁端部は直角に下方に折れ曲がる。径が18cm前後と大形である。焼成はあまり良好ではない。胎土が縞状のものもある。

II. やや偏平な宝珠形のつまみをもつ。体部は天井から口縁部にかけてふくらみをもち端部は、外反気味である。口縁端部は丸くやや内側に屈曲している。径は15cm 前後のものと19cm 程度のものがある。焼成は良好で火ダスキーが認められるものが1点ある。

III. 中央部が周縁部よりも低い偏平な宝珠形のつまみをもつもので、体部は天井から口縁部にかけて、ふくらみが少なくほぼ直線的で、口縁端部は直角に下方に折れ曲がる。径は15cm 前後である。焼成はあまり良好ではなく、赤褐色を呈している部分もある。

須恵器甕は1点のみで、口径が30cm 程度の中形のものである。口縁部から頸部にかけての破片で器形は不明であるが、最大径を体部にもつものである。

須恵器鉢は図示できるものが2点ある。径が36cm 程度の大形のものと20cm 程度の小形のものである。口縁端部はいずれも上下につまみ出されている。

須恵器長頸壺は体部と口縁部から頸部にかけての破片が出土したのみであるが、非常に特徴的な形をもつ。すなわち体部は細身で長い円筒状を呈し、肩がやや張り、頸部は口縁部に向かってラッパ状に開き、口縁端部は丸くおさまる花瓶形のものである。頸部は口縁部の傾きからみると比較的長くなるものとみられる。また、体部内面にはロクロ成形の際の指痕が螺旋状に顕著に残る。

この他に円面鏡の脚部破片が1点ある。下端に向かって緩やかに開き、端部は下方に若干突き出している。円孔と短冊形の窓が交互にあり、円孔の上下に3本単位の櫛歯による波状文が加えられている。

出土遺物は以上のように分類されたが、これらの出土状態は、前項で述べたとおり、ほとんどが堆積土中からのもので、住居内での使用段階の組成・原位置をそのまま保っているものではなく、住居が廃棄され若干の土砂の堆積が進行した後、炭化物などと共に一括投棄されたものである。しかし、この遺物を多く出土した第2層は、土などの混入が比較的少ない炭化物の層で、しかも断面からは、連続して堆積した場合にみられるラミナ状の堆積状況も観察できることや、第2層の上面と下面から出土した遺物間に接合関係がみられることなどから極めて短時間で堆積したものであり、遺物群はほぼ同時期の所産と考えられる。

遺物に関しては、上記のように器形や調整などの特徴からいくつかのグループに分類することができた。一般的には、同一器種内での特徴の差異は時期差や供給源の差に由来すると考えられる。しかし、堆積状況からみて、この2層から出土した土器群に時期差があったとは考えにくい。一方、焼成状況や胎土などの面について観察すると、軟質で赤褐色を呈するものや粘土の練り上げが不十分で、胎土に縞状の痕跡が残るものなどいくつかの共通する要素が壺I類、蓋I・Ⅲ類、高台付壺IA・IVA類のように器種をこえて見ることができる。このような特徴は同一工人や同一窯（窯群）という製作過程が極めて近い条件下で生みだされたことを示すも

ので、同一器種内に見られる様相の差異は、供給源の差と考えることが妥当であろう。

○出土土器の年代と問題点

これまで述べてきた土器の特徴は、土師器坏I・甕Iのようにロクロ使用のものと、坏IIのようにロクロを用いないものとが共伴し、須恵器坏ではヘラ切り無調整およびヘラ切り後底部に軽いナデや手持ちのケズリが加えられているもののみで構成されているというように要約することができる。このような土器組成の様相は、これまでの伊治城の調査でSI-04・SI-12・SI-31住居跡をはじめ数多くの遺構から出土した遺物と同様の特徴を示すもので、8世紀末を中心とする時期が考えられている。(多賀城跡調査研究所：1978他)しかし、今回出土した土師器坏IIは、SI-04の土師器坏と比べて体部外面に明瞭な段や稜をもたないという点で、若干新しい要素をもつ。また、これらの遺物を出土したSI-173住居跡はSB-175建物跡よりも新しいことから、さらに上限は限定される可能性がある。

次に、これらの土器の下限について、延暦21年(802)に造営された岩手県水沢市胆沢城跡出土の遺物と比較してみる。胆沢城跡の中でSD-114・SD-303溝跡は創建期に近い遺構と考えられており、9世紀初頭に位置付けられる土器が出土している。それらの土師器坏はすべてロクロにより作られているのに対し、伊治城SI-173出土土器はロクロ使用とロクロを使用しないものとが共伴する。このことからみれば技術的に伊治城の坏はより古く、胆沢城の創建期まで下るものではないと考えられる。

最後に須恵器の壺について注目したい。今回出土した体部が細身で、長頸でラッパ状に開き、口縁端部が丸くおさまる花瓶形の壺は、平城京土器分類による「壺G」と呼ばれているもので、8世紀後半～9世紀前半にかけてみられ、長岡京期に盛期を迎える。長岡京のSD-12013やSD-12032・SD-12028などから多く出土している(秋山：1986)。県内の出土例は多賀城市市川橋遺跡につづいて2例目である。「壺G」は、時代とともに器形の小形化、体部が丸味を帯びてくるなどの傾向性が指摘されている(酒井：1987)。本遺跡から出土したものは、比較的小形であるものの、体部の膨らみが小さく、肩がややナデ肩気味のもので平安宮左兵衛府跡出土(平尾：1978)のものとよく類似する。左兵衛府出土の「壺G」は「主馬」(781～808まで存在した官司)の墨書の土師器坏や長岡京と同一内容の土器群と共にしていることから、ほぼ8世紀末から9世紀初頭のものと考えられる。SI-173住居跡出土の壺も同様の時期が与えられよう。

以上から、SI-173住居出土の土器は8世紀末から9世紀初頭のものと考えられる。また、この他の住居(SI-171.172.174.177～179)からも同様の特徴の土器が出土しており、これらも8世紀末から9世紀初頭に位置付られよう。

② [遺構について]

これまでの伊治城跡の発掘調査で検出された掘立柱建物跡は12棟、堅穴住居跡は100軒以上にも上る。本項では、それらの中で唐崎地区の遺構を中心に述べてみたい。

○掘立柱建物跡（第27図）

伊治城唐崎地区の調査で検出された古代の掘立柱建物跡は7棟である。ここでは、これらの建物について配置や構成、性格について考えてみる。

まず、これらの建物の中でSB-150はSI-158と、SB-141はSI-174と、SB-175はSI-172・SI-173と、SB-176はSI-171とそれぞれ重複が認められ、いずれも堅穴住居が建物跡を破壊しており建物跡が古い。また、建物には、建て替えの痕跡は認められなかった。建物の規模について判明しているものは7棟中3棟であり、すべて2間×5間（6m×15m）の建物である。また、柱間寸法は3.0mを中心とする2.85m～3.10mの範囲に収まることから3m（10尺）を基本としている。また、建物間の距離はSB-140とSB-141、SB-141とSB-175、SB-175とSB-176間の距離からみて、6m（20尺）を基本としているものと考えられる。

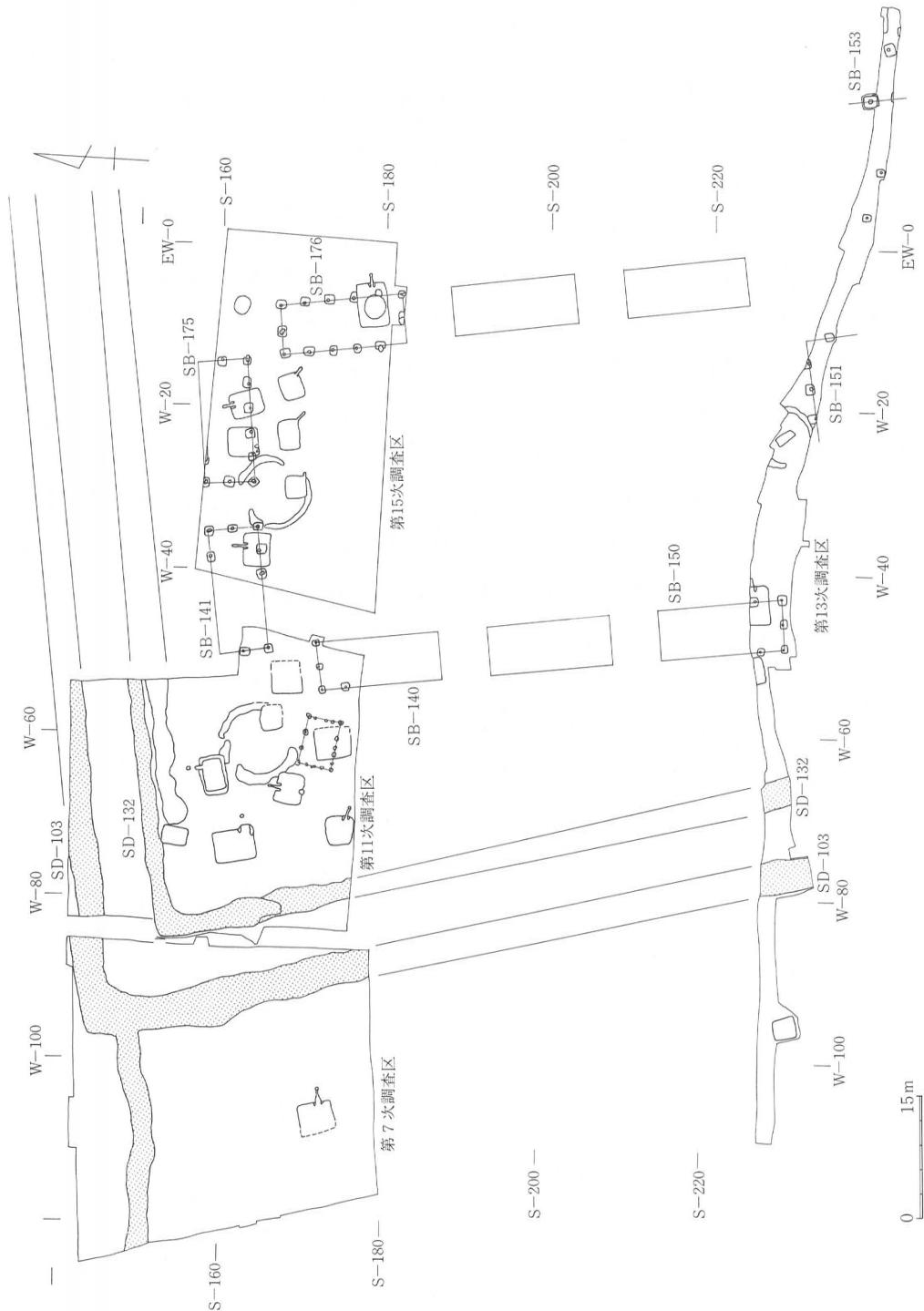
次に建物の配置を見ると、北側には東西に柱筋をそろえてならぶ2棟の東西棟建物跡SB-141とSB-175があり、その南東にはSB-175の東妻と西側柱列の柱筋をそろえた南北棟のSB-176がある。また、西南側にはSB-141の西妻と東側柱列の柱筋をそろえた南北棟のSB-140がある。

さらにSB-140の南には東西の側柱列と柱筋をそろえた南北棟の建物SB-150がある。SB-150は建物の南半の部分が検出されたもので、規模などについては不明であるが、この建物の南妻はSB-140の北妻と平行し、その間隔はちょうど57mある。

ところで、これまで検出された建物はすべて2間×5間（6m×15m）の規模でしかも建物間隔はすべて6mである。SB-140とSB-150も同様の規模と考え、建物の大きさとその間隔の数値を合計してみると57mとなり、SB-140とSB-150間にはもう1棟2間×5間の南北棟が存在することが予想される。

さらに、これまで検出された建物はSB-140とSB-176、SB-141とSB-175というように対称に配置されることから、SB-176の南側にはさらに2棟の2間×5間の南北棟が存在すると考えられる。したがって全体的な建物の構成は、北側にSB-141とSB-175の2棟を置き、その前方両側に脇殿のように3棟づつ配し、全体として東西36m、南北63m、の長方形の空間を内部に取り込むような「コ字形」を構成していたものと考えられる。なお、SB-150の南妻から南側6m離れた東西ライン上に北側柱列がのる東西棟建物SB-151があるので、配置は「コ字形」ではなく「ロ字形」になる可能性もある。

第27図 挖立柱建物跡配置模式図



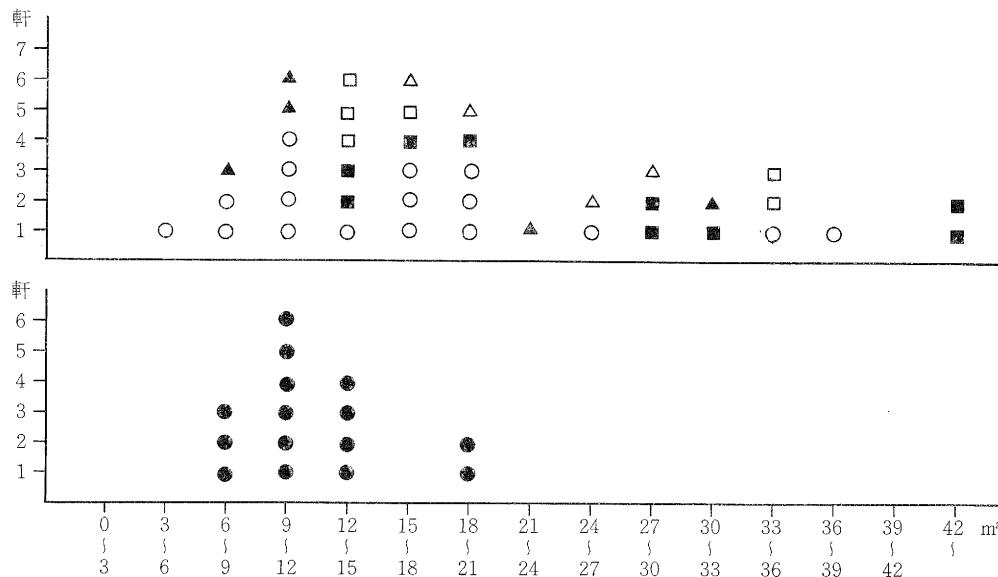
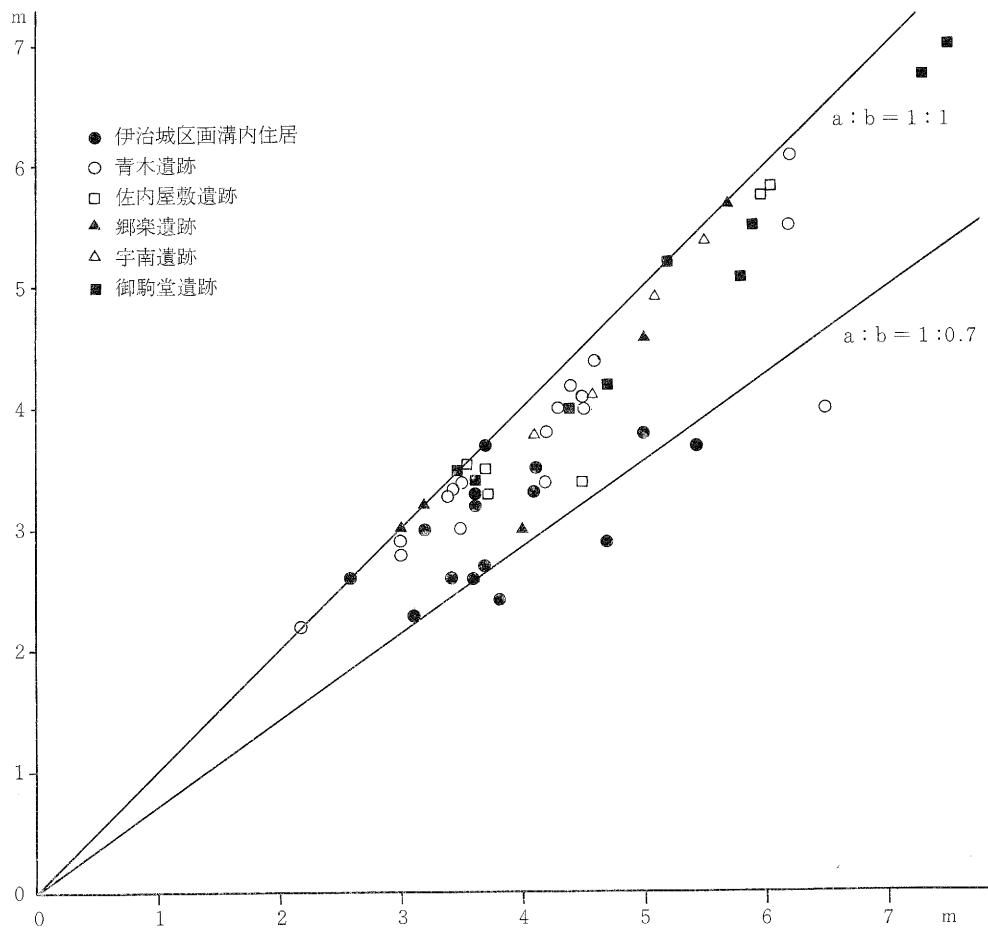
上記のように、これまでの調査で二重の溝によって区画された建物群が「コ字形」(もしくはロ字形)に配置することが明らかになった。これらの建物は伊治城の重要な施設の一部と考えられるが、正殿にあたる建物がないこと、2重の溝による区画内で北西に偏っていることなどから政庁域とするよりも、胆沢城北方官衙・東方官衙や志波城政庁南東官衙域などにみられるような「官衙ブロック＝実務域」である可能性が強い。

○堅穴住居跡

唐崎地区から検出された住居は合計30軒であり、その中で規模の判明しているのは15軒である。住居の規模は一辺が3～4m程度のものがほとんどで、比較的小さな住居が多く見られる。これらの住居と、同時期で他の遺跡のものと比較したものが表1である。

平面形についてみると伊治城では長方形を基調とし、長辺：短辺の比が0.7付近に集中するのに対し、他遺跡では正方形を基調とするほぼ1.0のライン上に分布している。また、床面積では他遺跡のものが10～20m²付近に1つのピークがみられるものの30m²以上まで広く分布する傾向があるのに対し、伊治城のものはほぼ6～15m²の範囲に集中し面積が著しく小さく、他の集落のものとは異なる。出土した遺物から、これらの住居は同時期に存在したと考えられ、時期的には8世紀末～9世紀初頭に限定されることから、短期間のうちに建てられたものとみられる。遺構の密度は第11・15次調査に限れば、わずか1800m²の面積に18軒も存在するように、限られた地域の中に非常に密集していることが知られる。

以上のように、きわめて短時間のうちに集中的に住居群が作られている様子を、自然に集落が形成された、と考えるのには無理があり、むしろ他地域からの移住など人為的要素によるものと考えることが妥当であろう。



第1表 竪穴住居の規模の比較

V ま と め

1. 今回の調査では、新たに2棟の掘立柱建物跡が検出された。昨年までの成果と合わせると、これらの建物群は「コ字形もしくはロ字形」に配置することが明かとなった。これらの建物群は「官衙ブロック＝実務域」であると考えられる。
2. 掘立柱建物跡は柱穴の観察から、立て替えなどは認められず、存続期間が短かったものと考えられる。
3. 建物の方向は、N—8°—Wを基準線としており、真北方向とは若干ずれる。これは地形による制約に起因するものと考えられる。
4. 壇穴住居跡は、新たに8軒検出され、ほぼ同時期に集中して建てられたと考えられる。このことは、移住などの人為的要素に起因する可能性がある。
5. 本遺跡は、当時の官衙の構造を知るばかりではなく、古代東北が律令体制に編入されていく過程を知る上で貴重な遺跡である。

引 用・参 考 文 献

- 秋山浩三他（1986） 「長岡京跡左京第120次」向日市埋蔵文化財調査報告書18集
- 岡田 茂弘（1985.3）「東日本における古代城柵遺跡の研究」昭和59年度科学的研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書
- 小川 淳一（1980.9）「青木遺跡」『東北自動車道遺跡報告書IV』宮城県文化財報告書71集 宮城県教育委員会
- 小川・小井川（1982）「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡報告書VI』宮城県文化財報告書83集 宮城県教育委員会
- 菊地・吉田（1990.3）「郷楽遺跡」宮城県文化財報告書 134集 宮城県教育委員会
- 工藤 雅樹（1989）『城柵と蝦夷』ニューサイエンス社
- 酒井 清治（1987.3）「武藏国における須恵器年代の再検討」『研究紀要9』埼玉県立歴史資料館
築館町教育委員会（1988.3）
『伊治城跡－昭和62年度概報』築館町文化財調査報告書第1集 築館町教育委員会
築館町教育委員会（1989.3）
『伊治城跡－昭和63年度概報』築館町文化財調査報告書第2集 築館町教育委員会
築館町教育委員会（1990.3）
『伊治城跡－平成元年度概報』築館町文化財調査報告書第3集 築館町教育委員会
- 平尾 正幸（1978）「平安宮左兵衛」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所
- 水沢市教育委員会（1977.3）「胆沢城跡－昭和51年度調査概報」水沢市教育委員会
- 水沢市教育委員会（1978.3）「胆沢城跡－昭和52年度調査概報」水沢市教育委員会
- 水沢市教育委員会（1987.3）「胆沢城跡－昭和61年度調査概報」水沢市教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1978.3）
『伊治城跡 I』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊 宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所（1979.3）
『伊治城跡 II』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊 宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県多賀城跡調査研究所（1980.3）

『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊 宮城県多賀城跡調査研究所

森 貢喜（1983） 「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡報告書Ⅷ』宮城県文化財報告書93集 宮城県教育委員会

遊佐 五郎（1980.3）「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡報告書Ⅲ』宮城県文化財報告書69集 宮城県教育委員会

伊治城および栗原郡に関する古代史年表

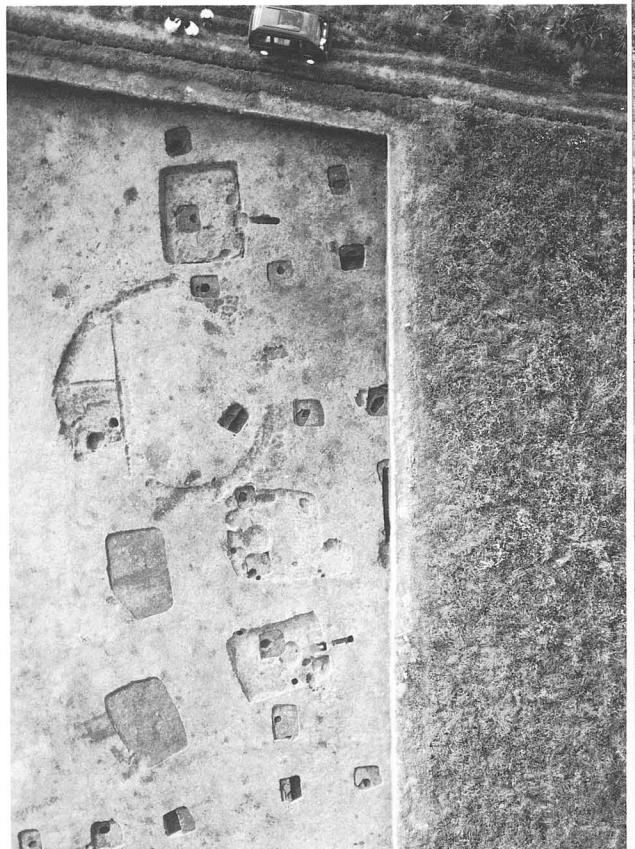
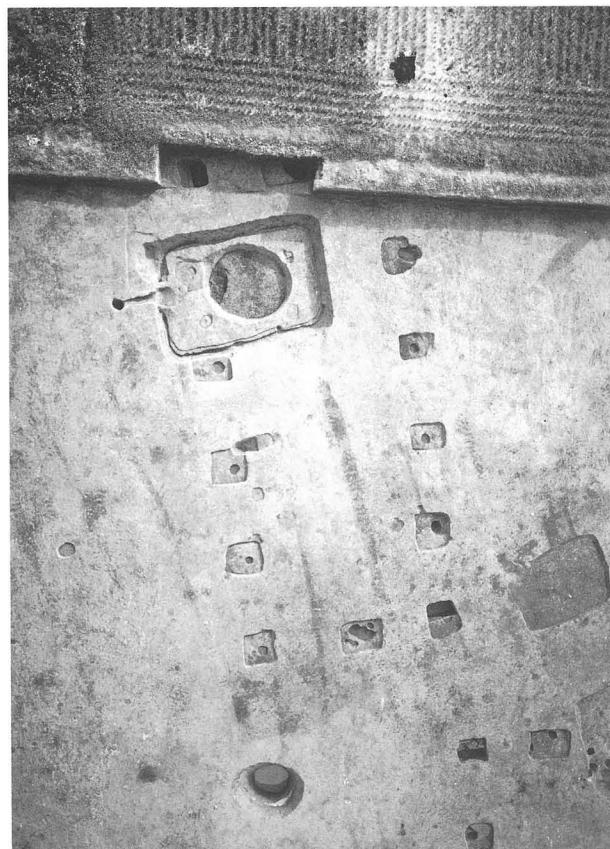
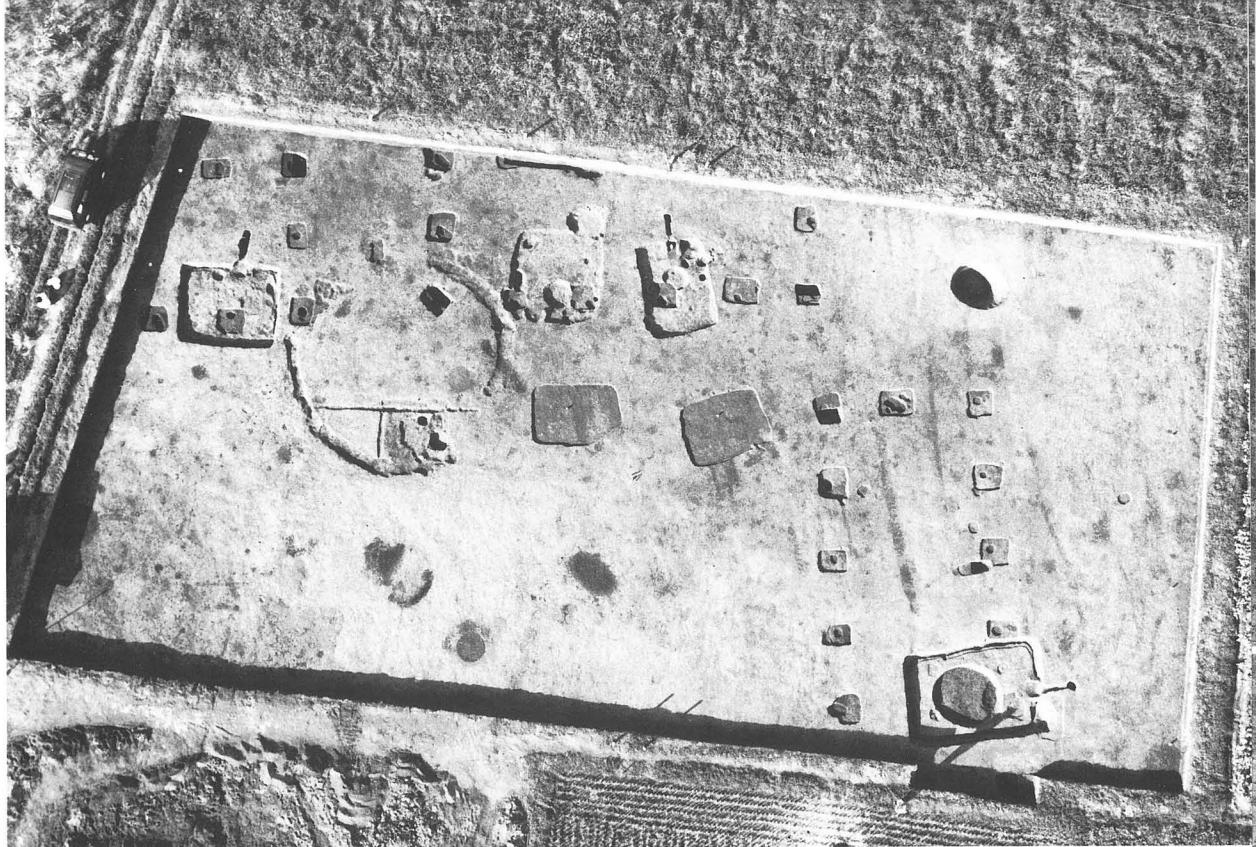
西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に坂東8国の百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (「続日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に收めるが錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮容の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公皆麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大権按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史卷190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅をおく。	日本後紀

西暦	和暦	記事	文献
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 <small>名大神</small> 雄銳神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 ○民部式 東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥国駿馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	延喜式
931～938	承平年間	和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名)栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康平5	8. 前9年の役で源頼義軍は、栗原郡菖岡に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文治5	8.7 文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞭楯(仙台市)に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大將軍となし数兵の勇士を差しむけた。 8.21 頼朝軍は暴風雨について途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾妻鏡
1190	建久1	2.12 頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士，在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。 3.10 栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。	吾妻鏡

写 真 図 版



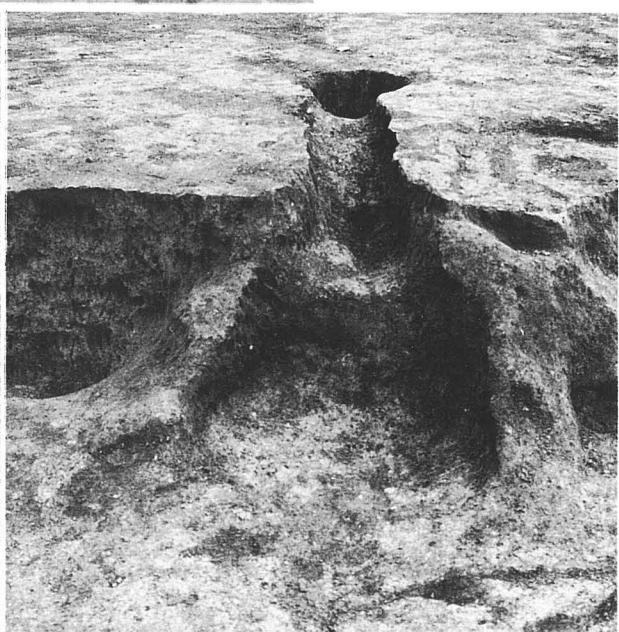
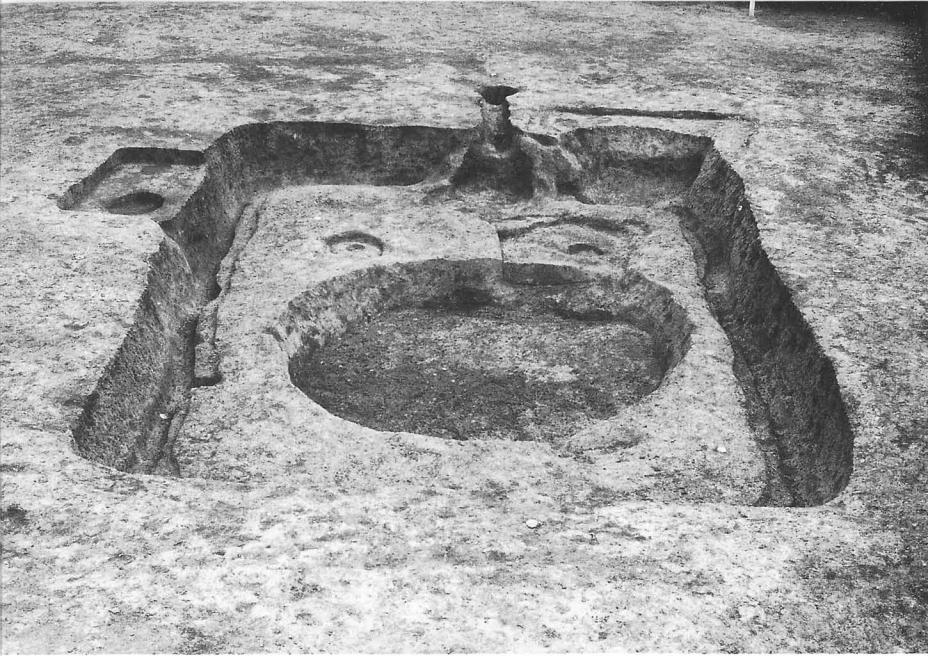
図版 1 上:遺跡全景(南から)
下:調査区遠景



図版2 上:第15次調査区
下右:SB-141, 175建物跡 下左:SB-176建物跡

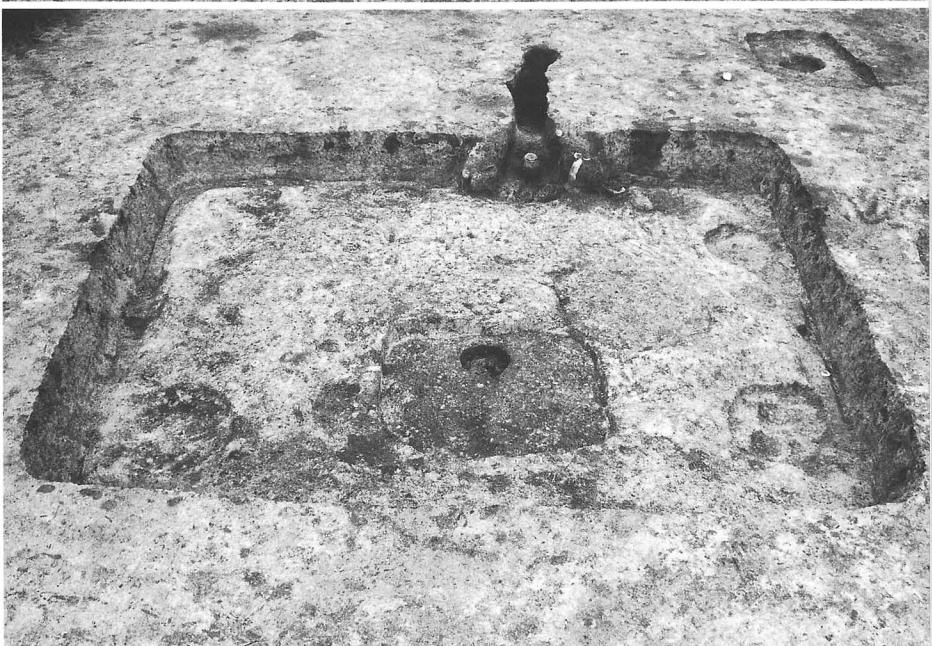
図版3

上: SI-171住居跡
中: SI-172住居跡
下右: SI-171カマド
下左: SI-172カマド



図版4

上: SI-173住居跡
中: SI-174住居跡
下: SI-174カマド

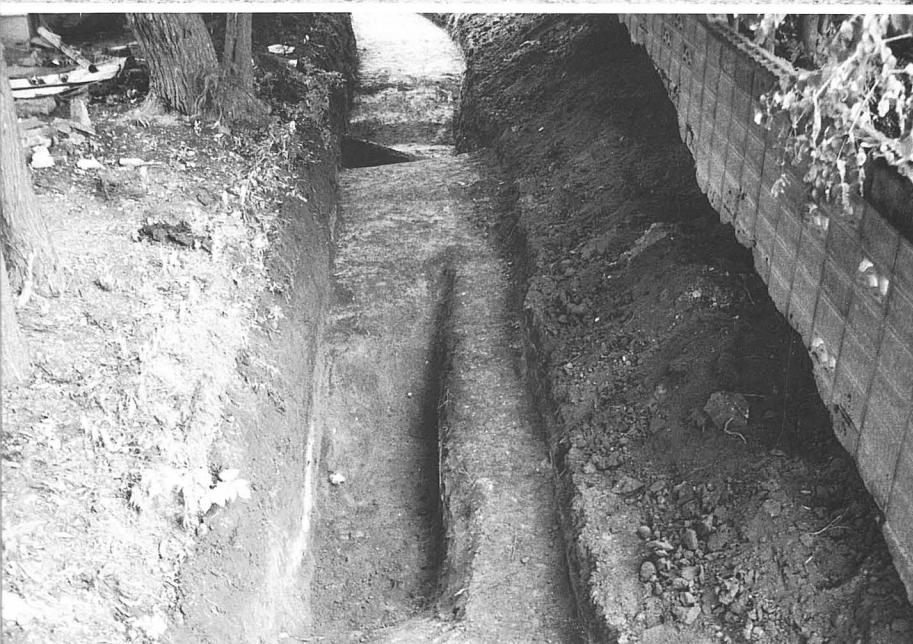


図版 5

上:第15次調査区(西から)

中:SD-181円形周溝墓

下:SD-201・202溝跡





171-3



172-5



172-4



3



6



9



10



11



12



14



24



25



26



27

図版 6 S I-171~173住居跡出土遺物



31



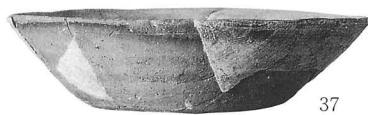
34



35



36



37



38



39



40



41



45



48



47



50



69

図版7 S I-173住居跡出土遺物(2)



29



73



15



78



74



75



76



77



79



80



68

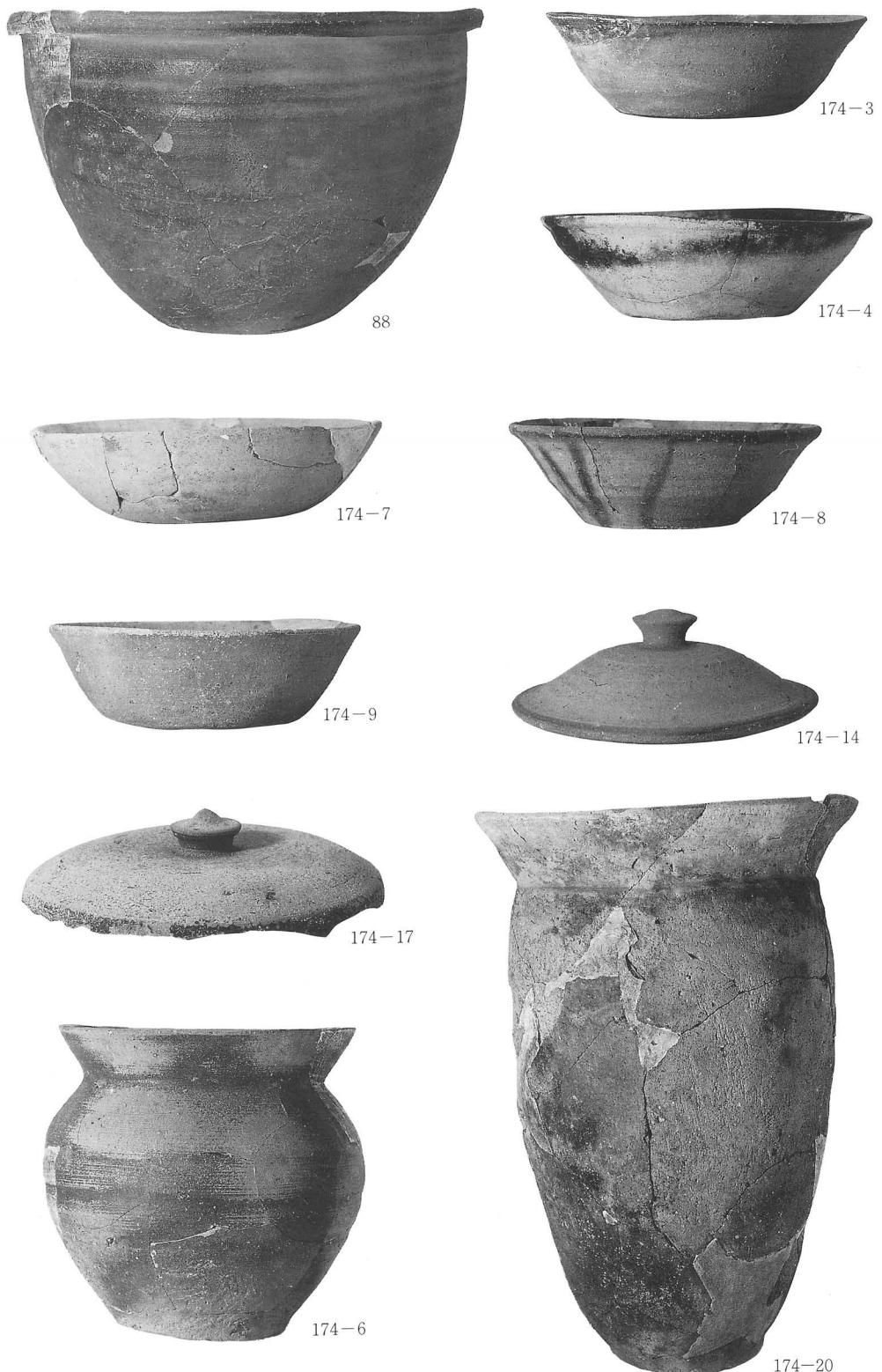
図版 8 SI-173住居跡出土遺物 (3)



図版 9 S I-173住居跡出土遺物 (4)



図版10 S I-173住居跡出土遺物 (5)



図版11 S I-174住居跡出土遺物



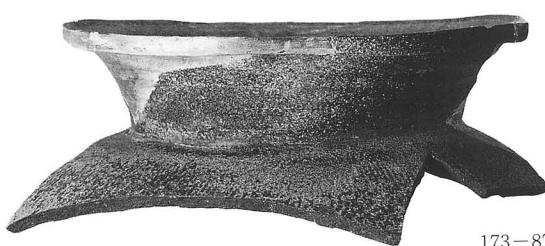
174-1



179-1



177-1



173-87



173-86



174-22

図版12 その他の出土遺物

築館町文化財調査報告書 第4集
伊治城跡

印 刷 平成3年3月20日
発 行 平成3年3月31日

発行 築館町教育委員会
宮城県栗原郡築館町薬師三丁目6-1

印刷 南部屋印刷株式会社
宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36
